アタゴオルは猫の森 8

ますむら・ひろし

ATAGOUL is Cat's Forest



MFコミックス
フラッパーシリーズ

アタゴオルは猫の森 8
ますむら・ひろし

MEDIA FACTORY

ISBN4-8401-0999-0
C9979 ¥514E
9784840109994
1929979005146
定価：本体514円（税別）
雑誌52642-99
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY

すべての始まりはヒデヨシが大ダコ・マサオシを生食いしたことだった。
伝説の海賊・異断銀のギンダウル号を手に入れ、波動王の力を得たヒデヨシたち。
タコを崇める八腕教と海賊モズマ男爵との関係は?
そして謎の法王リバが波動王の力を使って企んでいる事とは?
すべての謎は復活した異断銀が握っているのか!?
前巻に引き続き「波動王海談記」後半8話を一挙収録。
作者書き下ろしの近況報告「アタゴオル余波8」とともにお届けします。



ますむら・ひろし

昭和27年生まれ
山形県出身。
昭和48年デビュー作『霧にむせぶ夜』が
『週刊少年ジャンプ』に掲載。
その後青林堂に入り
雑誌『ガロ』を舞台に活躍、独立後現在に至る。
平成9年には『アタゴオル玉手箱』で
日本漫画家協会賞大賞受賞。
宮沢賢治作品の漫画化にも意欲的に取り組み、
独自の感性で大胆に視覚化している。
中でも『銀河鉄道の夜』は
昭和60年、劇場アニメとして公開、
マンガファンだけでなく
宮沢賢治愛好家の間でも高い評価を得ている。

装画・ますむら・ひろし
装幀・多田和博＋岡田ひとみ
フォーマットデザイン・フィールドワーク

ATAGOUL is Cat's Forest

アタゴオルは猫の森 ⟨8⟩

ますむら・ひろし



アタゴオルは猫の森 8

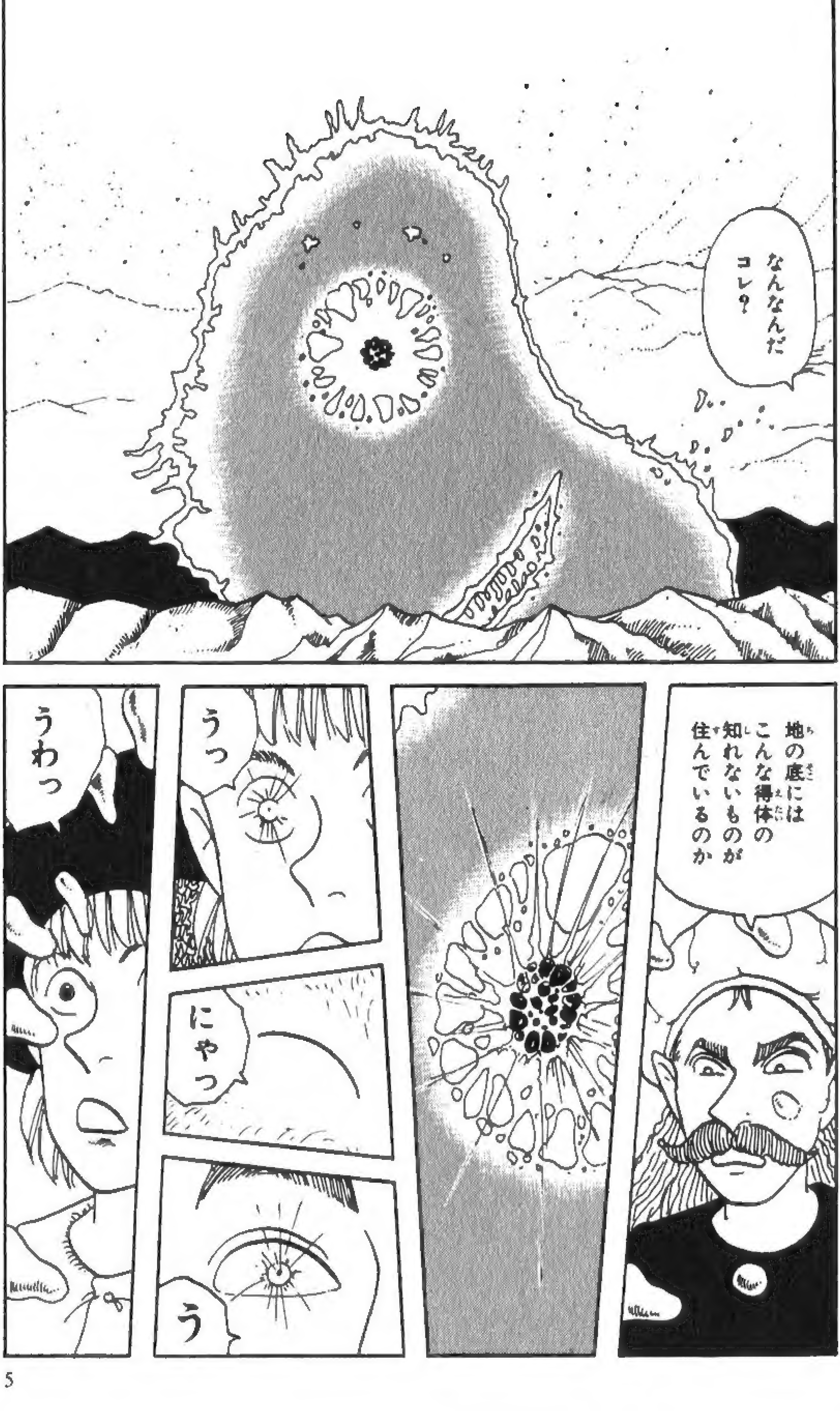
ATAGOUL is Cat's Forest

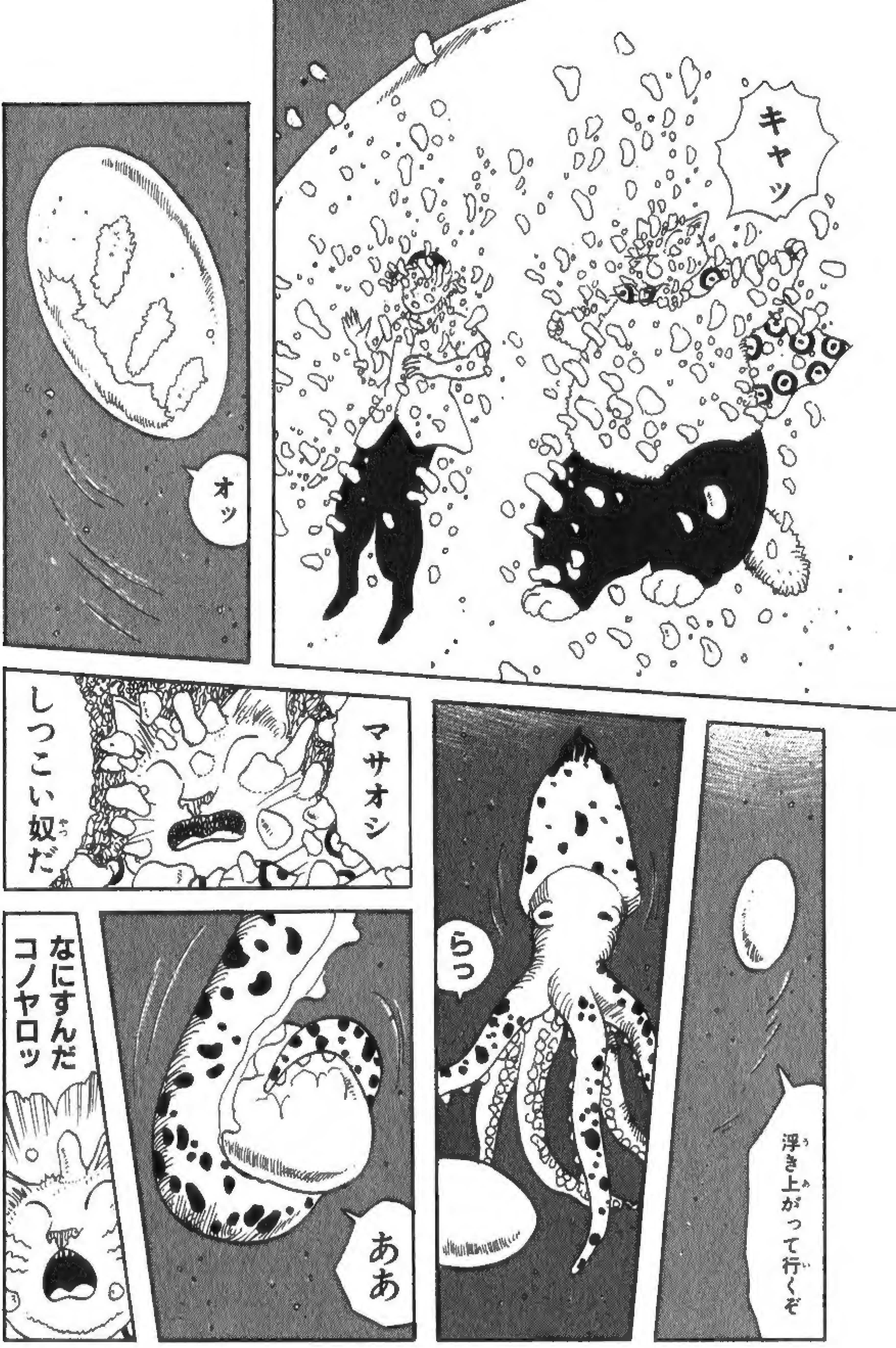
第一話　波動王海談記⑨〔アワ〕





地面の底から響いてくるぞ
なんて力強くて奇妙な旋律なんだ
この星の内部の熱気のような…
このアワ凄いなあ
入ってくるとズンズン力が湧いてくる感じがするぞォ
ああ体の中を熔岩が流れているみたいだ
いい気持ち
それにしても


なんなんだ
コレ？
地の底には
こんな得体の
知れないものが
住んでいるのか
うっ
にゃっ
う
うわっ



キャッ
オッ
マサオシ
しっこい奴だ
浮き上がって行くぞ
らっ
ああ
なにすんだコノヤロッ


ぐわふ
ぷはーっ
ふあっ
くっそお
マサオシの
野郎──っ
海の底に
耳の型の
割れ目!?
そーなのよ
そこから
目玉の化け物が
出て来てよォ


目玉の化け物
モズマ様こやつの言ってることは…
本当だ
青白い巨大な……得体の知れないものだった
こらヒゲじじいオレの言うことを信じてないなっ
海の底から音楽が響いて変なアワが体にシュポシュポ入ったのよ
変なアワ？
ああっ体に入ってくると不思議な力を感じたんだ
すんげえイイ気持ちなんだよォ
海の底の音楽とおかしなアワ…
それが波動王海図が示したものなのか…


アワは気持ちよかったけどもっと凄い宝物でもあると思ってたのになあ
確かに…
ところでモズマ様この海域にとどまっているのは危険かと…
うむっひとまず南下した方がいいな
おんやくっ弱虫海賊
逃げるのかよォ
モズマ船長はバンドゲル帝国の戦艦を沈めたので賞金首が2万金貨ですからねえ
2万金貨かあこいつを…
とっつかまえてバンドゲル帝国に引き渡せば大金持ち…だろ
らっ
貴様


船長──っ
どうしたトンボ
らっ
凄ーい
たたた大変です
完全に囲まれていますっ
バンドゲル帝国の海軍だ
くっそォなんでこんなにやって来るんだ
誰か密告者がいるんじゃねえかっ



アンタじゃないの?密告者
ミッコクシャってな〜〜に?
しかしこれだけの軍艦に囲まれると突破するのは至難だな
御安心下さい異断銀船長
我がギンダウル号は完璧な防御力でありますぞっ
海賊船に告ぐモズマ船長を引き渡せ
船長さえ渡せば 残りの海賊どもの命は助けてやる
なんだとコノヤロウ
ふざけんなっ



オレたちがモズマ船長を売り渡すと思うのかっ
渡しますっ渡しますっ
だから2万金貨ちょーだい
なんて野郎だ
でし
でし
返答無しとみなし攻撃態勢に入る
おまかせあれ
来るぞ
磁場壁作動


ズバッ
うわっ
防御壁はどうしたっ
くあっ
なんだこりゃ
器械が壊されてますっ
なんだとっ
船の中に裏切り者がおるな…


裏切り者っていったらやっぱり
ヒデヨシ君ですかねえ
ウーーッそう思いますねえ
やっぱりおまえか
違いますーーっ
砲撃しながら右に転回だ
撃てえっ
撃ちまくれえっ
ドン


バガウッ
当たり
大当たりなのよォ
あっ
ドン
なんだあのでっかい玉はっ
にゃーーっ？
パシュ


なっ
なんだぁ このぶさいくな器械は!?
この猫臭い
捕獲の価値無し
なに言ってんだ このオンボロ野郎
これは歩く生ゴミ命令対象は



モズマ男爵
貴方を捕獲して
ただちに
処刑します
ド
ドッ
コン
コン
その首
切りとります
ファズ・モル
ブンダル
にゃっ？
トンボ・プラモ大佐
命令変更
ですか

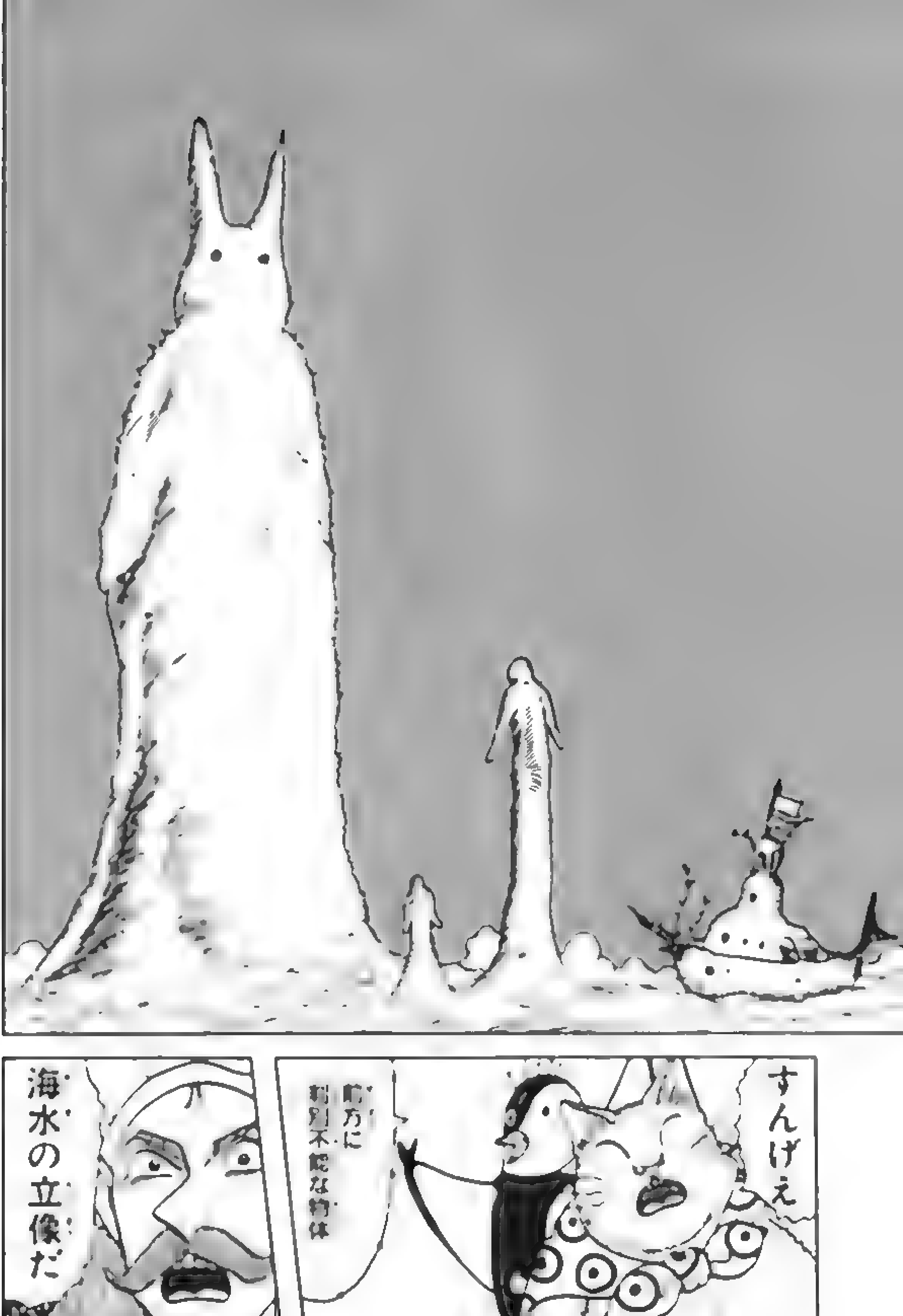

トンボ大佐
だとっ
貴様っ
バンドゲル帝国の!!
ええっ トンボが裏切り者か
ホントかよォ
アンタねえ 裏切りはクズのやることだぞ
おまえに言われたくないぜ
命令を変更する
「モズマ船長・パンツ・ヒデヨシ・テンプラ」
「この4名以外全員を処刑せよ」
ええっ
なんだよトンボ なんでオレたち4名だけ処刑されるんだよ
おまえ
人の話ぜんぜん聞いてないな
トンボ貴様 本気でオレたちを処刑する気か


ああっ
全員重しをつけて
海中に沈んでもらおう
バルゲッ
うわっ
バチッ
ひいっ
ああ
バキ
バチ
ああコノヤロ
トンボてめえ
やめろォ
うるさい
猫だ
ふが


いいっ
みんな数珠つなぎになって 海の底へ沈んでしまえっ
やめろっ
大切な部下を
うっ
こらっ ヒデ丸をはなせっ
らっ
アワだっ
あのアワが出て来たぞ



にゃ？
ズ…
ズズ…
ザ
ん
ズズ…
あっ


すんげえ
前方に
判別不能な物体
海水の立像だ


このアワが動かしてるみたいだっ
そっか
するとあのデッカイのがオレのか
オーイ おまえーっ 器械どもをやっつけろーーっ
あれっ
踊り出した
ザザザ…
動くぞ
オレの意志で
やれっ


ザバッ
ボン
うわっ
ドッ
でっ
素晴らしい
まさに波動王だな
え!?
トンボ
おまえいったい!?


パラスラハル
うわっ
あっ ヒデ丸っ
ヒデ丸の命をあずかるっ
バギルゼラの都で待ってるせ
ヒデヨシの立像のそばを飛ぶぞっ
おおいっ
そいつを引っつかまえろ
クルッ
ああ


もっと激しく
踊り出したぞ
ザバッ

第二話　波動王海談記⑩
〔最後のお願い〕




なんだ
ありゃ
でかい
ばかりで
ちっとも
役に立たない
うーっ
ああ
ヒデ丸
くっそおっ
トンボの
野郎
船長 オレたちに
小舟を貸して
下さい
おまえたちだけで
バギルゼラまで
行くつもりか



ヒデヨシなんか役に立たないし行ってもつかまるだけだろう
小舟なんて言わずこの船で乗りこもうぜ
なに言ってんだ
船長には賞金がついてるんだぜ行くわけねえだろう
プッ
臆病者――っ逃げんのかよォ
オレの船で子猫がさらわれて
見捨てて逃げたとあってはな…
針路を南西へ
よーしモズマ偉いぞっ
それにしても
なんなのだこのアワ猫


アワのように
見えるが
なんとも
得体の知れない力が
入っているようじゃぞ
これって あの海の底から
湧いてきたアワだろう
海底からの力か
おおっ
海水立像が
ついてくるわよ
まだ
踊ってる
うっとうしい
奴だな
いいノリ
してるわよォ


それに ひきかえ
テンプラのは
地味だなあ
モズマの
半分もないしよォ
態度のデカさと
関係あるんじゃないですか
世の中を
ナメきっている度数
じゃないの
ちがいますーっ
元気の大きさなのさ——っ
あら
アワ同士で
遊んでるぞ
しかし
モズマの
アワ
かわいくないな



失敬な野郎だな まったく
それにしても波があんな風に…
!
おおっ できるっ
ふははは
まったく素晴らしい
オレの意志で波が想いのまま動くなんて!!
あっ
オレのも動くぞ
くそ――っ
なんでオレのは動かないのォ
勝手な踊りしてっ



「波動王」とは 波を想いのままに 動かすことなのか
でも「王」なら たったひとりのはず
海水立像は 3体あるぞ
ヒデヨシのは 動かないから 1名脱落だっ
そんなーっ くっそーっ 納豆食え ないぞーっ
トンボの野郎 説明して くれーーっ
……
トンボかっ
しかし アイツは どこまで知って いるんだろう?
2日後
フーーッ


よーしっ
修理完了
カシガラちゃん
スゴイじゃないの
ホントに直したのか？
私はこの船の一部です
すべては 船と私の
創造主である
潮目博士の
お力であります
潮目博士？
そんな
お方が
おったのですか
潮目博士とは
偽名だよ
偽名!?
偽名とは
どういうことだ



この紋が判るかい？
ええっ
これってっ300年前の天才発明家
海に消えたパンタゲルチ伯爵
ああっ その紋章が この船の船底に彫られていたんだよ
なんだとっ
あの伝説の男の作った船なのかっ
するってえと この骨男の器機も・・・
いかにもヨネザアド大博物館に鎮座する芸術品だよ
大陸の宝だ


エエエッ
ききっ
緊張するなあ
うははは
諸君
頭が高いぞ
予を
丁寧に
あつかい
たまえ
そこの
下女
鯨油を
持ってまいれ
フン
フン
腹立つなあ
いっぺん
分解してやろうか
コラ〜〜〜ッ
凶暴な
娘だのう
あっ
うわっ


テマリちゃん
どいつも こいつも
役に立たぬ…
最初のデブ猫は
馬鹿野郎だし
モズマは
狂気の時代を
過ぎたようだ
こうなりゃ
この娘で
十分…


みなの者
オレが異断銀だ
ヒエーーーッ
おなつかしきそのお声
ホントに異断銀様だあ〜〜〜っ
なんだっ
テマリがおかしくなったぞっ
デブ猫テマリとやらの体はもらった
コーラ
テマリはどこにいったんだ
娘は眠っている


あっ そう
そんじゃ ず〜〜っと 眠らせててね
なに!?
あの声が聞こえなくてホッとしてまするぜ
わははは
さあ祝いじゃ
飲め飲め
異断銀ちゃんえら――い
凄えなあ昼間っから祝宴とは
異断銀様は伝説よりも豪快だなあ
フーム…。

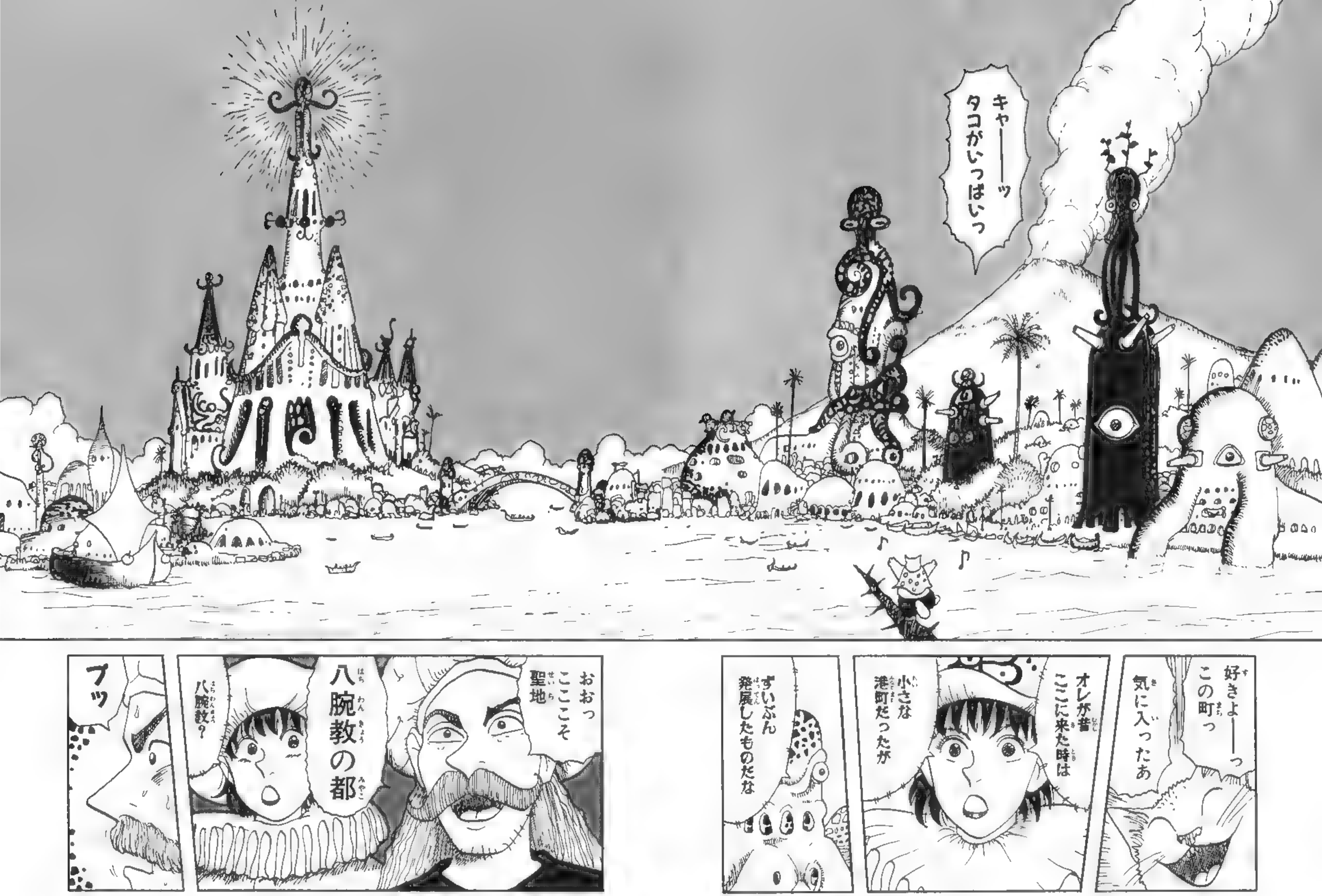


モズマ様
もしや……
回心を?
狂気の時代は過ぎただと…
狂気はただの若さと
馬鹿さのせいさ
いえ〜〜〜っ
それにしても体も気持ちも急に軽くなった…
どうやら あの銀弼鍵…
あの中に 異断銀の意識が……


しかし
おかしいな
この船の主は
異断銀様に
なられたのに…
針路はバギルゼラを
目指したままだ
ありがとう
ございますっ
ヒデ丸を
お助け下さい
異断銀船長
「波動王」とは
何なのですか？
子猫に興味は
ない
あのトンボと
いう奴に
用があるのさ
のう パンツ
この世には
知らないほうが
身のためなことが
あるんだよ
ギクッ
うっ


モズマ君 お主を副船長に 任ずる……
不服かな？
光栄の 極みで あります
みなの者 オレたちは 異断銀様の傘下に 入ったっ
せよっ
ブルウ・パッセン
よう カシカラに スズッペ
なにやってんだ？
テマリに 乗り移った 異断銀様の 様子が…… 変なんだ
変？


どうも高圧的というか なにか凶暴というか
変にイライラしているというか
そういえば「海の紳士」「夕凪の聖者」のふんいきはなかったなあ
テマリのせいだよ
えっ…まさか…?
あんがいそうかもしれないぞ
3日後
陸が見えて来たぞ
おお バンドゲル帝国の都
ここがバギルゼラ


キャーーーッ
タコがいっぱいっ
好きよーーっ
この町っ
気に入ったぁ
オレが昔
ここに来た時は
小さな
港町だったが
ずいぶん
発展したものだな
おおっ
こここそ
聖地
八腕教の都
八腕教？
ブッ



ブルウ・パッセン・
ベクネクル・
ボカニュクル
スミル・
フッキーダ・
ブクップル
くね
くね
くね
なっ
なに
やってんだ
モズマ
聖八腕の世界から
のがれようとして
大罪を犯そうと
帝国の船を
沈めた……
だが 私がまちがって
いた
くね
くね
聖八腕様
懺悔して
赦しをこいます
おおっ モズマ様が
覚醒されたっ



ブルウ・バッセン・ペクネクル・ボカニュクル
ああ
どれほどこの日を待ったことか
ちょっと
アンタたち海賊じゃないのかよ
いかにも
ワシらは八腕教の者 そして モズマ様こそ3代目の教祖になられるお方
さあこれで長い間がまんしていた気持ちを出せる
ああっ そうだっ 偉大なる大ダコであらせられる


マサオシ公の御御足をかじるなどと〜っ
ゆるせん
ぐえっ
畜生猫め
ボコボコにしてやる
ゆるしてくれえ
金返すからっ もうしないから
なに言ってんだ貴様
ネズミ札イカサマだったのよォ
コノヤロやっぱりそうか
あの馬鹿なによけいなこと言ってんだっ
あーーあ…


海の掟は守らねばならぬ
異断銀様「しばり首」の可を
許可する
ゆるしてくれよお
絶対二度とイカサマしねから
テマリてめ〜〜っ
板を落とす前に望みをひとつかなえてやろう
言ってみろ
くっそォ本気でやる気だな
そんじゃあ……
なんだと
貴様 本気で言ってるのか
ザザザーッ
くぬぬ まったく なんて奴だっ
ああ


はぐ
はぐ
追いつめられて食うタコは格別だなあ

第三話　波動王海談記⑪
〔聖輝腕城〕




にっちゃ
くーっ
んめえ
くっちゃ
あらら
くっそおっ
悪魔猫め
小八腕様(タコ)を
食するなんて
もほほっ
あいつ
しばり首だと
いうのに
ぜんぜん
ビビってないぞ


度胸がいいというかアホというか
食い意地が恐怖を超えているのです
あのクサリ
ヒデヨシの体重で切れるんじゃないか
異断銀様
それはありえません
象をぶらさげても切れない強いクサリですから
それじゃあ安心
きれいにぶらさがるな
く〜〜っ
んまかったわ
タコもー1丁


ふざけんな
コラッ
1体で
十分だ
ケチ
ようし
始めろ
ええっ
おどしでしょう
ホントに
やるのかよォ
本当さっ
だから
イカサマするなって言っただろう
おーい海水の
固まり様――っ
助けて
くれえ



オレは殺され
そうなんだぞォ
らっ
コーラッ
なに踊ってんだよっ
役立たずーーっ
あれっ ついに
立像が
消えてしまった
なんか
本当に
使えない奴
だなあ
う〜〜っ
死にたくねえよォ
も〜〜っ
イカサマ
しねーから
ぜ〜〜ったい
しねえから
ゆるしてくれえっ



船長 お慈悲を
どうか助けてやって下さい
絶対的懇願
海の掟は曲げられぬ
警告を無視した者はその責めを負うべし
コラ おまえたち泣けーっ
土下座して泣いてたのめーっ
なんだアイツ
助けがいのない奴だなあ
くっそーっ どいつもこいつも役立たない
こーなったらもー アイツにたのむしかねーな


ギルバルスーーッ
助けてくれーーっ
ようしヒデヨシ念ぶつをとなえろ
おまえの信仰の言葉を語れ
信仰なんて知るかっ
タコをもっと食わせろっ
この畜生猫板を落とせっ
ら
あーーっ
ガシャッ
ぐえっ
ふぐっ


すっぽーん
キャーーーッ
ドボォン
首が太くて
はずれやがった
悪運の
強い野郎だ



わっぷ
つかまらないわよォ
ぷはーーっ
はーーっ助かった
すんげえ あたり一面 タコの町っ
らっ
ずいぶん偉そーなタコだな
我が家の神様 ブッタ様じゃよ


プッタ様？
くーーっ ヨダレが湧いてきちゃう
!
らっ
ブッ
このタコ
なにするんだっ
アンタが ヨダレなんか たらした からだよっ
小八腕様に 向かって 失礼じゃないか
なにがコハチワンだっ うまそーな タコ見て
ヨダレが湧くのは あたりまえだろ
アンタこの町の者じゃ ないなっ これ以上無礼を 働くと うちのプッタ様は 武術を習ってるんだ
容赦しないぞ


こっちこそ容赦しないわよっ
あーっ ブッタ様
ドスドスッ
きれいに食ってやるぜ
小八腕様の誘拐発生
ウーーッ ウーーッ
パーローーッ
どふふふ
オレ様にスミぶっかけるふとどきダコめ
この口で成敗してくれるわよっ


あう
ガッ
ガスッ
痛で
痛でで
くそっ
ら
テンプラ
おーーいっ
おまえたち
どこ行くんだ?
おまえ この町に
なにをしに
来たんだよ!?
タコ食いに
もーーっ
すっかり
忘れてんだな


ヒデ丸を助けに来たんだろう
そーだ ヒデ丸
トンボの野郎
ちょっとオッちゃん
トンボ知らないか？丸いメガネの男
トンボ大佐のことか？
そーよっ モズマんとこを裏切った奴よ
あいつドコにいる？
大佐なら…近年 この都市にいなかったが 最近
聖輝腕城で見かけた者がいるとか……
セーキワンジョーってどこ？
ホラ あそこだよ


くーっ
かっこいい城だな〜〜っ
あっ
モズマ様だ
お尋ね者の…
2万金貨の賞金首が帰って来たぞ
どういうことだ!?
ブルウ・パッセン
ペクネクル・ボカニュクル
スミル・フッキーダ
教典入信節を読んでるぞっ
大法王の三世になるのか
扉を開けよっ
モズマ・バラウラ帰依しに参った



オーイ
モズマ オレも 入れてくれっ
大法王に面会したい
聖なる泉を通りぬければ お会いできます
聖なる泉？
昔 そんなものは なかったが…
にやっ


い〜〜っ ニオイッ
ジョボ
なんだ コレは タコのスミか!?
凄い ニオイだな


聖なる泉はタコのスミーッ
パンツ早く来いよォ
ああヒデ丸はどこに？
なんだろうタコのスミ以外の匂いがするな
拝謁者はそこで待て
ピッローー!
大法王様のお出ましーーっ
うっ



モズマ よくぞ もどった
八腕教への帰依を認めよう
あらつトンボの野郎
だが 国軍の船を沈めた罪は つぐなうべし
奇樹島への幽閉30年を命ずる
ええっ 法王様
それは あんまりな
その声 貴方は 私の父では ないな
おまえの父は すでに 奇樹島へ幽閉されている
なんだと

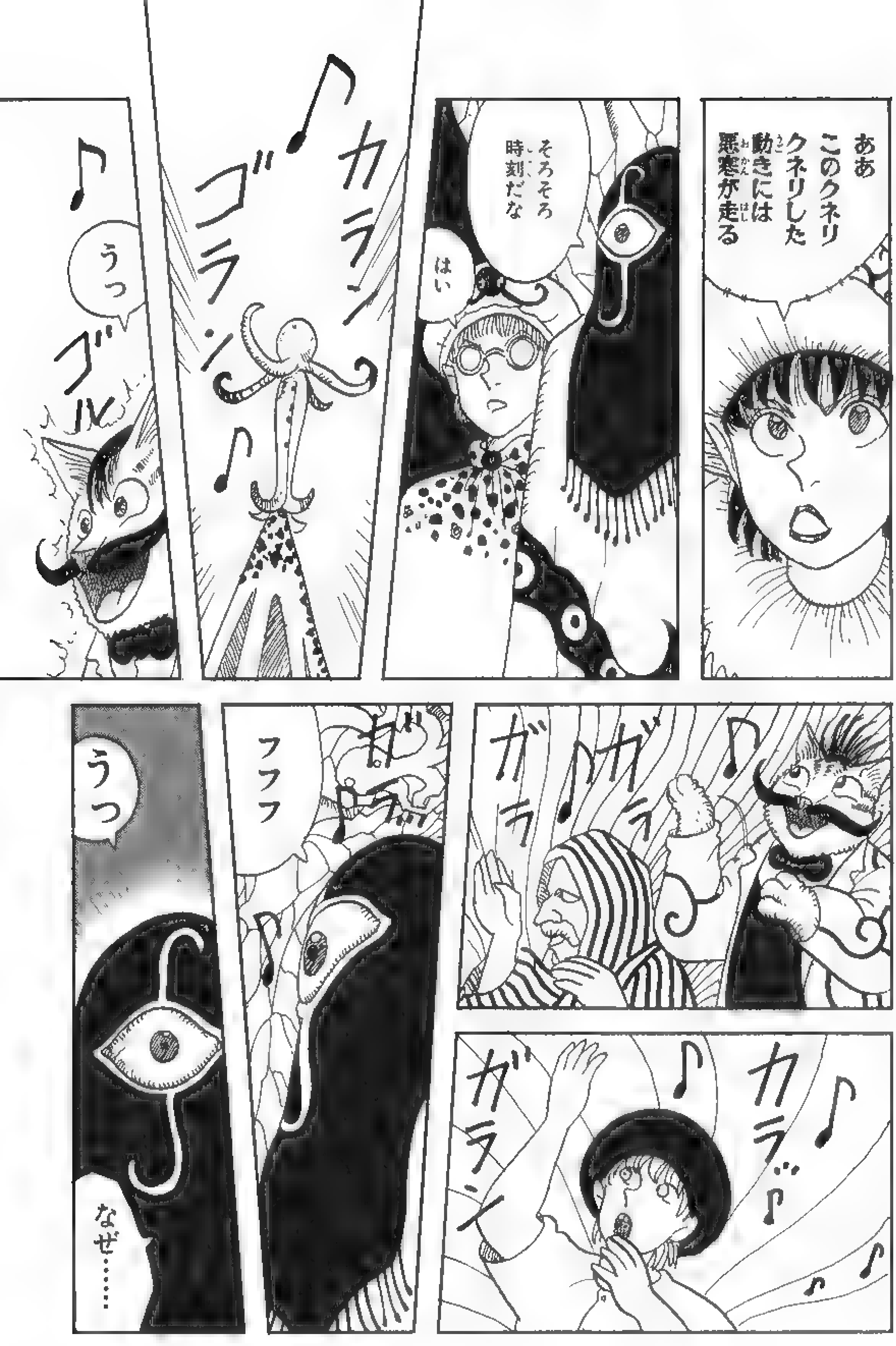


トンボッ
これは
どういうことだ
フッ
見ての
とおりさ
法王二世は失脚し
第三世リバ様が
聖なる主なのだ
そして波動王の
力がくわわった時
八腕教は
世界を包むのだ
モズマ船長
テンプラ
ヒデヨシ
しっかり働いて
もらうぜ
こら
トンボ
そんな
ことより
ヒデ丸だ
ヒデ丸を
返せっ
ああ 約束だったな
ヒデ丸を
返してやれ
おっ
ヒデ丸
助けに
来たのよォ


寄るなっ 臭い悪魔猫
にゃっ
どうしたのよォ ヒデ丸っ
八腕様を 食らう 最悪生物め
ヒデ丸 しっかりしなさいっ
みんな おまえを 助けに 来たんだよ
音符に 心を売った 貴方こそ 目をさまし たまえっ
ななっ なんですとーっ
くーーっ テンプラ君 なんとか 言って下さい


八腕様を冒瀆する極悪猫めっ
なに言ってんのよ
八腕様のクネリの中に宇宙の美がある
いかにも八腕様こそがっ真理の型
こらっテンプラどうしたんだあっ
我れ八腕様の僕なり
これはいったい…
八つのォ御腕の吸盤はあ


信ずる者の胸に住むう
闇に張りつき輝きのォ
パンツ これはどういうことだと思う？
この泉のスミの中になにか原因があるのでは？
オレもそんな気がする
どうやらタコ嫌いで助かったな
異断銀船長 タコが嫌いなんですか


ああ
このクネリクネリした
動きには
悪寒が走る
そろそろ
時刻だな
はい
カラン
ゴラン
うっ
ゴル
ガラ
ガラ
ガラー
カラ
フフフ
うっ
なぜ……


こいつだけ踊らないんだ?

第四話　波動王海談記⑫
〔タコ・タコ・タコ〕




聖なる泉に入りながら
八腕塔の鐘の調べに反応しないなんて…
こいつはいったい何者なんだ?
おいヒデヨシ
おまえはこの音楽になにも感じないのか?
変なのよォ
オレはどんな音楽でも
乗りまくれるのにさ


この音はダメだな
音楽じゃないぜ
フッ
あんまり鈍感すぎてスルドイ者のようなことを言う
聖なる泉に反応しないような奴は使いものにならん
こやつは放置して残り2名を波動王として使用せよ
ハッ
あっコラ待てっ
目玉野郎


ヒデ丸を
元にもどせっ
やかましい
この
役立たずっ
とっとと
この町から
出て行け
そーだっ
消えろ
八腕様を
食べる
悪魔猫め
も〜〜っ
八腕様は
美しく〜〜っ
八本の腕でぇ
おい
トンボ
あ〜あ
どー
なっちゃった
のよォ
うっ


テマリッ なんで浮かんでいるんだ?
オレはテマリではない 異断銀だ
異断銀船長!?
船長の霊が何故ここに?
波動王の秘密がオレを眠らせないのさ
トンボ おまえ ずいぶん秘密を知っているようだが
聞かせてもらおうか
伝説の船長の願いであろうが
オレはヒヂヨシとは違う 口は堅いのさ
口なんか堅くなくていーのよ
ぺろーっとしゃべっちゃえよ 楽しいぞぉ


おまえみたいな
口の軽い奴は
最低だぜっ
ツメのカケラほどの
信用もない
クズ猫めっ
あーら
そんなこと
言うの?
じゃ
コレ
なあにっ?
あっ
おまえ
それ!?
へっへっへっ
おまえの船室の中に
ドロボウに入った時に
見つけたのよ
ずいぶん
大切そうじゃ
ないのさ
貴様っ
返せっ
どうやって
手に入れたのか
話したら
返してもイイぜ


ホントか
ああっ
生ダコ3匹
つけたらな
よしっ
オレが子供の時
浜辺の洞窟の中で
見つけたんだ
どこからか
流れついたんだろう
……
あっそう
スポッ
貴様
こらっ
返せっ
オレが約束
守るわけ
ね――べよ
なんて奴だっ
ガズウラ
ニッフ
ニッフ
ら
臭い猫
処理します


ぐわっ
しび
しび
しび
ビ
ビ
ビッ
その太い首
切り落とせっ
ひええ
パリッチエス
あら
どうして
オレの命令しか
聞かない兵士たちが!?
フフフッ


この器械を作ったのは誰だ？
オレだよっ
オレが作ったのにどうしてオレの命令を聞かないんだ？
器械の設計図は潮目博士が作ったものだからだろう
うっ
潮目博士ってパンタゲルチ伯爵がっ
この器械に絶対的な命令を出せるのはオレなんだよ
そのように設計されているのさ
くぬぬ
バジューダ ベスラ


八腕教の命ずるままに
命ずるままに…
！
チャプッ
こいつはスラかったほうがいいぞ
にゃあっ
バシャ
バシャ
シュル
シュル
ひえ——っ


シュル
くっそー しつこいぞーっ
シュル
あっ
キャーーーッ
あれ
もどって いくぞ
あんな 役立たずの 猫など どうでもいい
それよりも 「最期の舞」 計画に入れ
ハッ
ついに 波動王の 力を使う時が 来ましたね
ああ 八腕教の 腕が伸びて 行くのだ


天にからみつくようにな…
フフッ見たいか?
見たいに決まってるだろう
拝観料なんて言ってないで早く見せろよっ
へいへい
やっぱり……パンタゲルチ伯爵の紋章が入っている
ホラホラ
ここをさわると面白いのよ
カチッ
あっ


本だ
この筆跡は確かに 潮目博士のものだ
おお
煙の本だ
なんだ この爺いは
潮目博士だ
この人が…!!


「遠ざかる意識の中で
ここに記す」
「異断銀様に
心よりのおわびをしつつ…」
なにが
おわびだっ
くっそううっ
あらん
どうしたの
急に
さては
アンタ
この爺いに
だまされたな
お金取られたり…
そーでしょう
殺されたんだ
ギンダウル号といっしょに
沈められたんだよっ


ええっ殺された
も〜〜っ
なんで殺されたりすんのよォ
原因はなんなのさあ オレに話してみな 楽になっから
やかましいっ
ああっ気分が悪いっ
おいパンツ その本の中身 調べておけっ
オレは酒飲みに行くっ
キャーッ オレも連れてってくれーっ
来るな オレは静かに飲みたいんだ
静かにする!! 静かにするから おごってくれーっ



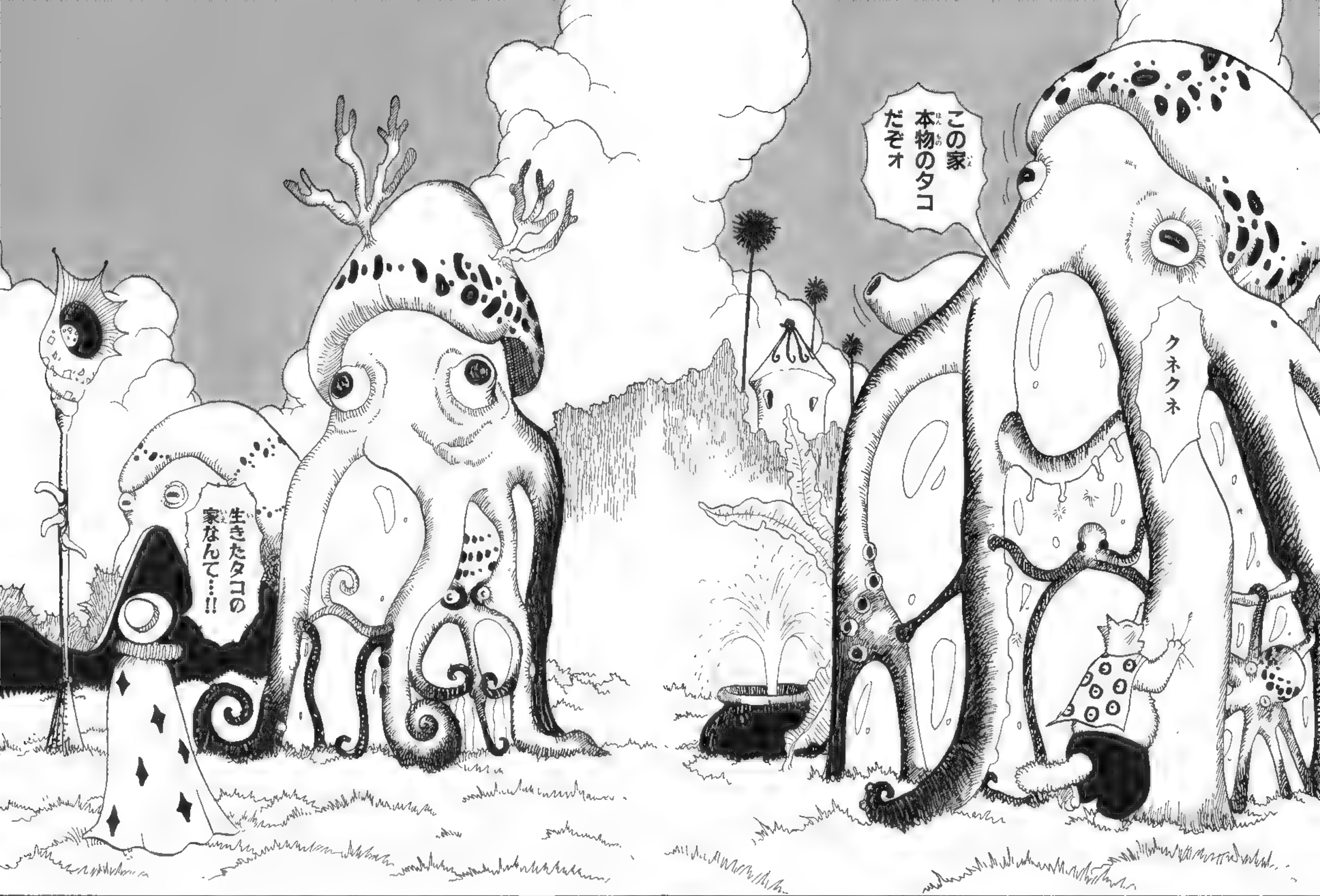
くーっ
パコパ様 今日も すばらしい クネリですねえ
タコに へつらってる 情けない 奴らだ
あっ
御腕をっ
御無礼を おゆるし 下さい


ぐわっ
バコバ様おゆるしを
助けてえっ
助けちゃうわよ
この凶暴ダコめっ
ボコ
ボコ
わはは
成敗してやったわよっ
……ああっ


なにするんだっ 貴様っ
ドスッ
らっ
パコパ様 しっかり してーっ
なんだよっ 助けてって 言うから やっつけたのに
八腕様に 首をしめられて 死線をさまよう のも修行なのだ
信仰の行の じゃまをするな
信じてしまった 者たちの やることは
その外側の 者たちの 想像を 超えて しまう
まったくよう



宗[redacted]もおまえもいっしょだな
なぬ？
なんか急に生臭い匂いがしてきたな
いいねえ
タコの匂いがプンプンプン
なんだこの通りは!?
ようこそ ここは八腕教徒の中でも強烈な者たちが住んでまするる
にゃっ
凄げーーっ


この家本物のタコだぞォ
クネクネ
生きたタコの家なんて…!!



こんなものに住みたくなる奴の気が知れん
最高だよ生ダコの家
腹減ったら柱かじれるんだぜい
かじるなんてとんでもない
いいですかこの家を手に入れるため私はどれだけ八腕教団に御布施したか!!
ん――っ銅貨3枚かな?
なに言ってんのアンタ
銀貨130枚ですよっ
にゃあ!?
130!?
ずいぶん高価だなあ


高価であればあるほど信仰は深まるのですっ
ホラ見て下さいっこのタンス
くね
くね
あらっこれも生ダコ!!
いかにも生ダコ製の家具いとしくなりますっ
八腕様だって血統書つきのジュジェジョ様とブッガゴ様をいただきまして
毎日が八腕様への想いでいっぱいなのです
く〜〜〜っ毎日生ダコの家でクネクネの家具のタコだらけ——っ
オレもほんとにタコ大好きだけどよォ
でも


タコにしばられちゃあダメよ――っ

第五話　波動王海談記⑬
〔覆面目玉男〕




ダーメ
ダメーッ
タコにしばられちゃあダメなのよーっ
八腕様(タコ)製の家や家具を手に入れるため必死で働いてきたんだ
生八腕の柱のクネリ
この肉々しい壁のふくらみ
八腕様に包まれて生きる幸せのどこがダメなんだっ
いくら好きでもしばられちゃあダメなの
だからね
この家
はぐ
オレが食ってやりまふ


こらあっ
やめろっ
大切な
オレの家
だぞーーっ
んめーーっ
まるで
白アリの
化け物
だな
ぐっ
キャーーッ
痛でで
ガサガサ
くっそーっ
凶暴な家
だなあ

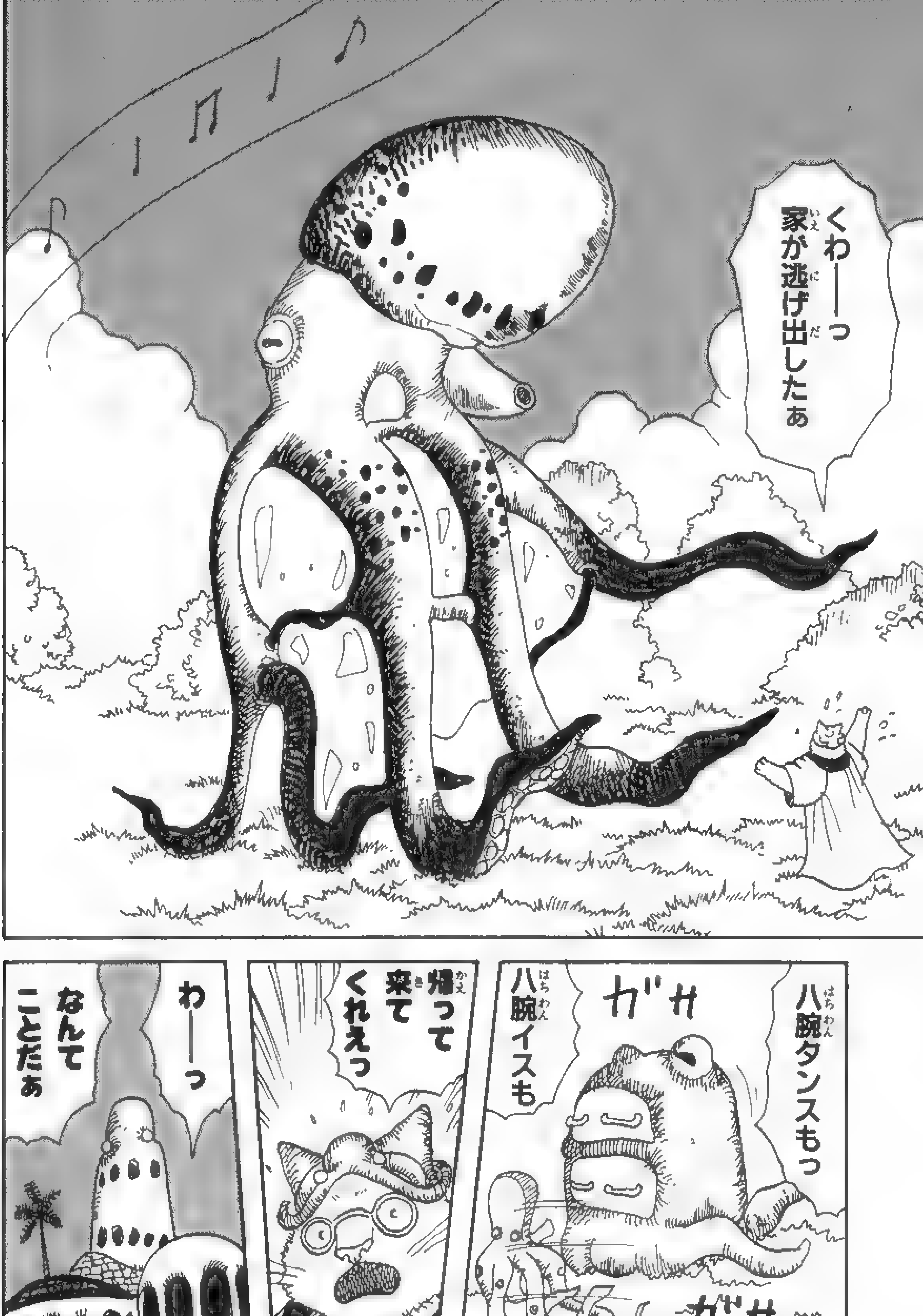

生ダコの家に住む奴も住む奴だが
かじる奴もかじる奴だ
このグンニャリとした歯ごたえがタマランのよォ
異断銀も食ってみな
タコは大嫌いなんだよ
「波動王とは…波の王なり」
「あらゆる波の源に君臨する…あっメラルうすっすーっだなベリ」
また始まった…



おーい パンツ
まだ やってんのかぁ
「ポンパるめんどに ガラええいする」
何語なんだ それ？
わからないんだよ
狂ったんだよ
狂った!?
ああ 潮目博士はな 波動王という能力を調べているうちに狂っちまったんだ
それで 貴方や 船を…!?


ああ キンダウル号は
博士が設計したものゆえ
奴の想いのまま
いっしゅんにして
オレたちは沈められたのだ
でも
どーして
そんな
ことに？
波動王の能力が
潜んでいる海底への
地図を手に入れた
オレたちは
その海域を
めざしていた
そして突然
博士が船を
沈めたんだ
博士は
ひとりじめ
しようと……
自分が波動王に
なろうとしたのだろうか
わからない…


おや…
鐘の調べがいつもと違うな
んっ
プルプル
パコパ様どうしました？
パコパ様ーっ
ガサガサ
わーっバゲッチ様ーっ
なんだっ タコどもが逃げ出したぞ
あっ
らっ
凄〜〜〜っ


くわーーっ
家が逃げ出したぁ
八腕タンスもっ
ガサ
八腕イスも
ガサ
帰って来てくれえっ
わーーっ
なんてことだぁ



八腕様が海へ帰って行くーっ
がら〜ん
みんな消えちまった…
はあ…
よーーっ親父タコの家無くなったなーーっ
くぬぬっオレの大切な夢の家があ…
でもヨカッタベ
自由になれて
自由…？
自由ってのは
すってんてんでなんもないことさ


はあ……
すべてを無くして感じるこの胸の
不思議な広さ……
自由なのよ
すってんてん最高――っ
おかしな調べのせいなんだ
オレの八腕様をどうして取り上げるんだあ
こら――っ
何故だあ
町の者たちがやっぱり騒ぎ出しました
放置せよっ それより純度はどうなってる？



純度は90
凄い数値です
インプルマ
インバエマ
インプルマ
インバエマ
さすがに
波動王だ
のう
海水を
分解して
我らの
聖水を
作れるのだから
まったく
です


それでは「最期の舞」の始まりとする
あれっ
なんだ?
急にあのアワが浮かんで来たぞ
フーム不思議だな……
もしかしたらテンプラやモズマたちがなにかしているのかもしれない
なにか?
ああ波動王の力を…
らっ
あっ


水の固まりが
飛んで行くぞ
奴ら 水に
乗れるのか!!
これも
波動王の力か?
そうです
あの煙の本に
書かれた言葉
によると……
ヒデヨシ 言ってみな
「ペズムリス・ゴロエ・ペレソル」
ペズムロ・ゴロペ…
違うよっ
いいか
ペズムリス・
ゴロエ・ペレソル


ペズムンズ・ゴロゴロ
こらっ
なんでこんな
かんたんなもの
憶えられないんだ
刺し身を
食べたら
すーぐ憶え
られるわよォ
ちゃんと言えたら
食わせてやるぞ
よーし
本気でやるわよっ
ペズマンタ・
ゴンタラ・ポー
どーだあっ
ヒデヨシ
叫ぶ前に
まず憶えろよ
おう
刺し身ちゃん
なんだか
カタツムリに
言葉教えて
いるような
もんだなあ
ザ――ッ


…ベゲムス・インスロルス
ベゲムス・インスロルス
ザザッ
おおっ
あれっ
らっ
なんだ あれはっ



凄ーー
海が盛り上がってるわよォ
海水の山だっ
くっそーっ なにが始まるんだあっ
あそこへ飛んで行きたいのよォ
行きたかったら真剣に言葉憶えろよ いいか ペズムリス


ペンズルス
あーっ ムリムリ
その臭い悪魔猫は憶えが悪いのだ
だからね
葉っぱを……
このようにちぎって……と
さあっ
コレなんだっ？
ペスムリス・…ゴロエ・
ペレツル
あっ言えたっ
ヒデ丸それはいったい!?
字の読めないスミレ博士のためにオイラが作ったスミレ文字です


ベスムリス・ゴロエ・
ベレツル刺し身ーっ
バシュ
キャーーッ わおーーっ
さあ 八腕教の夢の始[redacted]りだっ
あっ
おおっ 水がっ
トンボ 純度90のままで やれっ
えっリバ様 そんな濃度では
かまわぬ 始めよっ


しかしリバ様
…それでは
あまりに強烈な……
トンボ
予の命令が
聞けぬのか
おんやーっ
もめてます
なーーっ
目玉親父
あっ
貴様
水盤飛行が
できるのか？
できたの
よーーっ
言葉憶え
ちゃったのよっ
ところで
トンボ
その目玉野郎の
頭巾とると
どんな顔なのさ
リバ様は幼き頃に
ホッペタを銀ザメに
かじられたので
誰もお顔は拝見
できないのだ



銀ザメにかじられただとォ
どんな傷かなあ
フエフエ見たいなあ見せておくれよ
無礼者っ
この礼儀知らずの低俗猫めっ
リパ様は人間ですよオイラの勘では
いーやカツラみたいな大猫だろう
さ——てっ それでは頭巾とってもらいましょう
スーッ
んっ
オレも人間のような気がするぜ
うわっ


くぬぬ
らっ
タコだっ
そっ…
そんな!!
ウソだろう
銀しぶき
マダラダコだっ
トンボ
テンプラたちに
言葉を言わせろ
ふ…ふざけるな
オレは今まで…
タコに使われて
いたのか……


トンボに
ありがたい言葉をと
思ったが
よかろう
予が下す
ギッセル
ベッセラル
やめろっ
テンプラ
言うなっ
ギッセル
ベッセラル
ズズ


わっぷ
ああっ噴火してしまったっ
ギッセルベッセラル
ズドゥ
逃げろっ
逃げるのよーっ
あれっ
なんだ?
んっ
ありゃカッコいーっ


タコ型噴煙だわ

第六話　波動王海談記⑭
〔新海〕





キャーーッ もくもく タコ煙ーっ
しっかし 目玉野郎が タコとはなあ
言葉を 話す生意気な タコめ
あいつを食ったら んまいべなっ
ああ…… 法王三世のリバ様が タコだなんて…!!
おんや タコの子分は やめたのかい?
当たり前だろう
くっそお タコに だまされるなんて


しかし銀しぶきマダラダコが言葉を話すなんて……どういうことなんだ？
めちゃくちゃ頭のイイタコなんでしょうか
いくら利口でも言葉を話せるはずがないよ
たぶん潮目博士のせいだ……
ニャ？
え？
博士は タコの脳を活発化する研究をしていたんだ……
あのタコの名前は確か…ミドウリ


まさか あの時の タコが!?
らっ
シューーッ
ああ 始まった
トンボ
あの キラキラは なんだ?
恐ろしい気体だっ
ヒデヨシ 早く逃げろっ
おうしっ


うわっ
なにやってんだよっ
どうして
つっこむん
ですか?
逃げようと
思ってんのよォ
おまえ
本気で
思って
るのか
うっ
にゃっ
ああ


あら――っ
うわっ
体がっ
くっそおっ
フーム
なんでオレだけ変わんないのだろ?



それでも波動王のはしくれだからじゃないか？
トンボッなんなんだこれは？
最期の舞
最期の舞？
ああっ潮目博士の手記に隠し文字で
印されていたんだ……ああ……
ああっトンボが溶けるっ
くっすおう


この野郎
目玉のタコ野郎出てこいっ
ヒデヨシくんつっこむんですかっ
行けっ
ぐわっ
なんにも見えねえ
うぷ
らっ


ほう
その ふくらんだ体が溶けてないとは…
一応それでも
波動王なんだな
そうよっ はしくれなのよォ
しっかし生意気なタコちゃん
実にんまそうだっ
食ってやるぜえ
やかましい この無礼猫めっ
おいっ
おまえはミドウリじゃないのか?

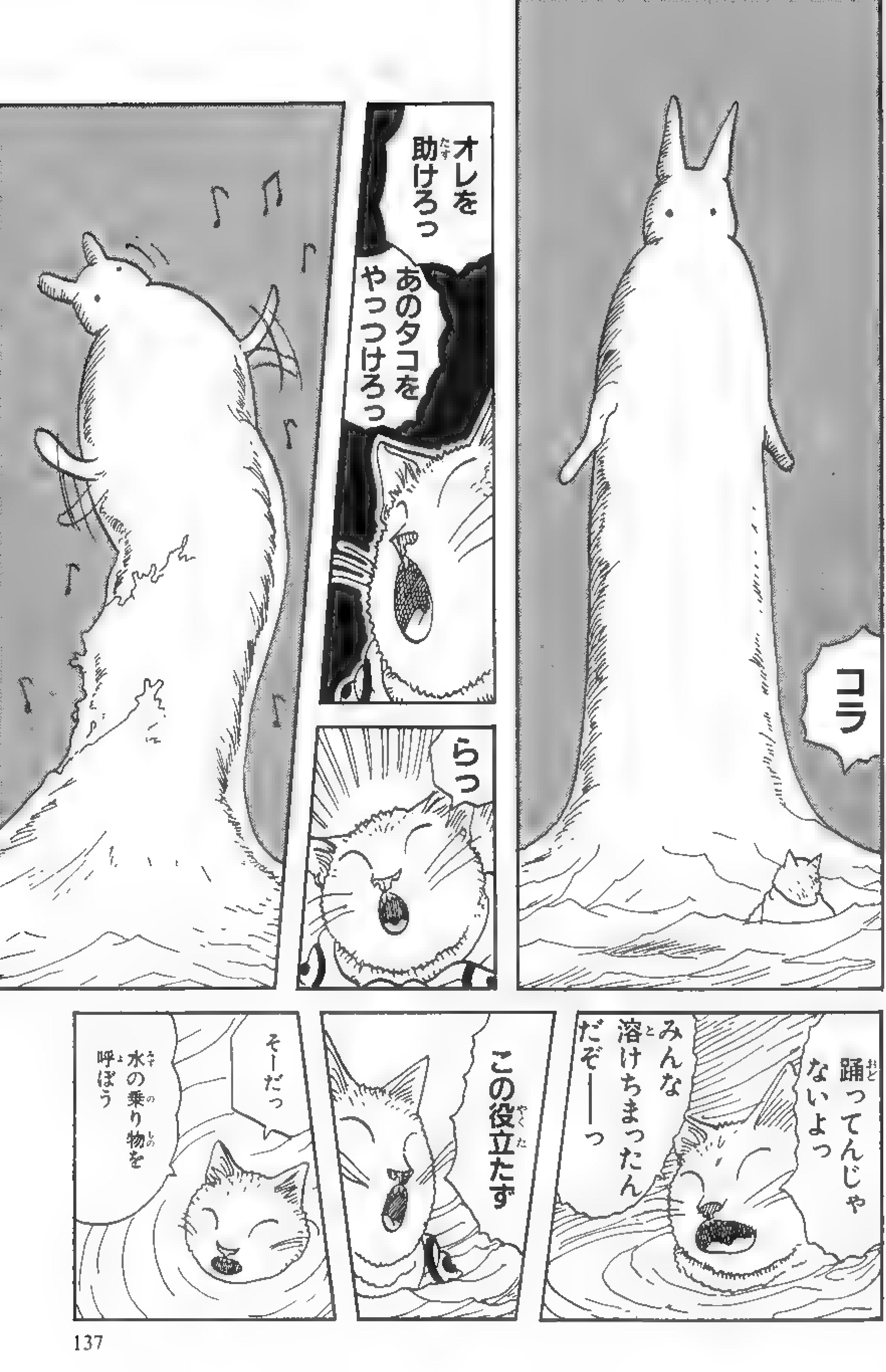

!
ミドウリ…
なつかしい名前だ
遠い昔そんな風に呼ばれていた
だが お主どうしてその名を知っているのだ?
この娘の体にのり移っているが
オレは異断銀だよ
オレは子供の頃からタコが大嫌いだったから
潮目博士にタコの実験なんかやめろと何度も言って…
異断銀……ワシを殺そうとした船長か
…だからだよ


それだから
ワシが潮目博士に
毒スミを吹きかけて
狂わせて
船ごと沈めさせたのさ
なんだとっ
ありゃーーっ
このタコ
相当の悪党でないかい
ますます
オレが食わなきゃ
ならないわっ
とうの昔に殺されたのに
まだ魂がウロウロしているとは
オレが何故
さまよっているか
やっと判った
おまえのようなタコに殺されたからだ
未練がましい奴だ
貴様を絶対
始末してやるっ
ふほっほっ
そんな溶けた体で
なにができる


オレにまかせろっ
きっれ──に
食ってやるわよォ──ッ
食い意地だけの
デブ猫は
問題外だが
残りはみんな
新しい海に
なる
新しい海!?
そうだ
ホラ
もう
うっ
ああっ


パンツも ヒデ丸も 異断銀も
みんな溶けて しまったっ
このタコ野郎 みんなをもどせっ
早くもどさないと おまえを生食いするぞっ
フッ ワシは 法王リバ様だぞ
おまえのような奴に かかわっている ヒマはない
テンプラ モズマ こいつを ぶちのめせっ
ハッ 了解 しました
コラおまえたち タコの命令を 聞くのかっ
そのタコは 大悪党だぞっ
イズルン バゼライ
イズルン バゼライ

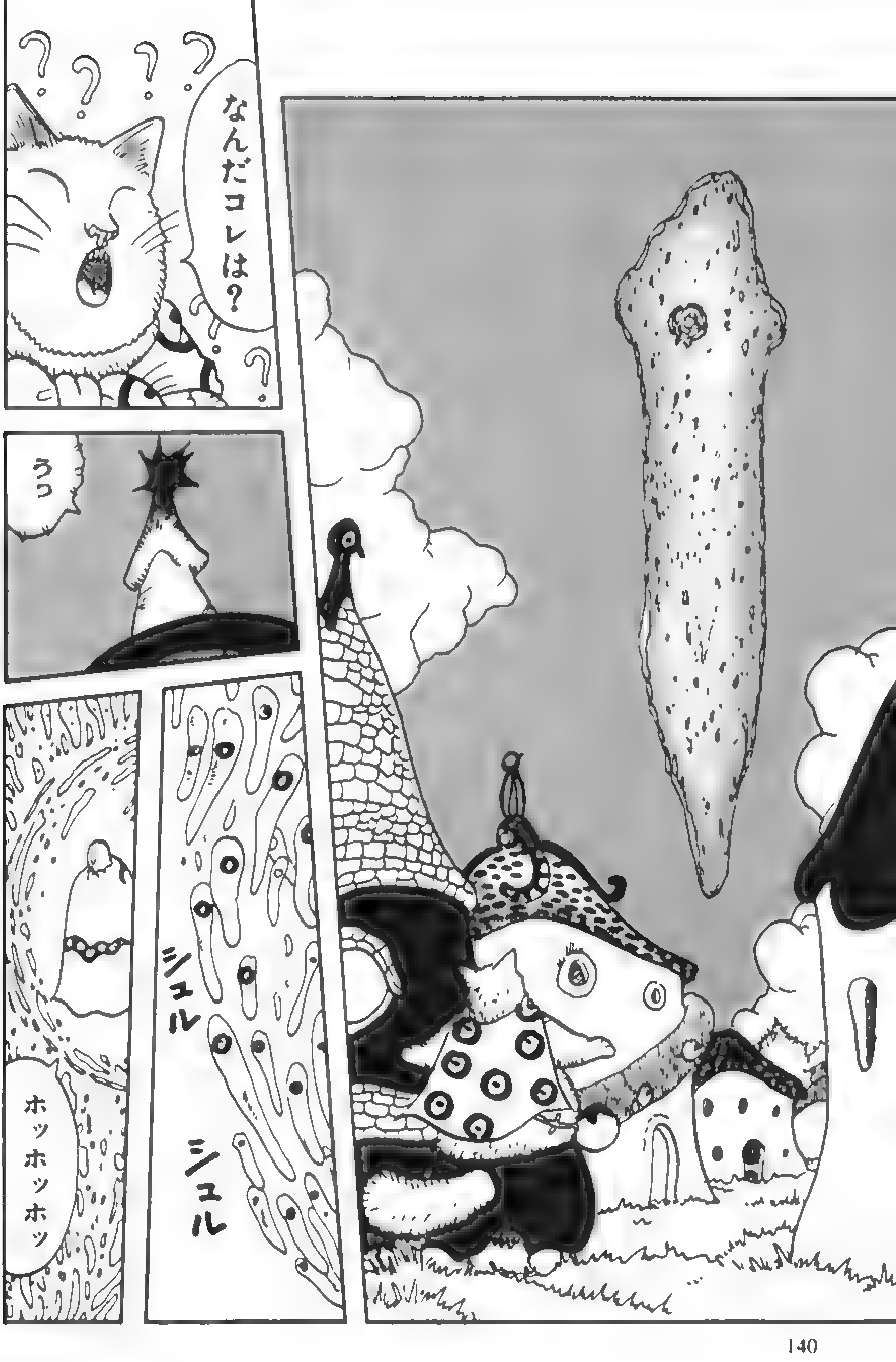

らっ
いっ
ドッボッ
ドドゥ…
キャーーッ
ザボーン!
くっそおお
んっ
らっ


コラ
オレを助けろっ
あのタコをやっつけろっ
らっ
踊ってんじゃないよっ
みんな溶けちまったんだぞ――っ
この役立たず
そーだっ
水の乗り物を呼ぼう



んーーと……
あの言葉は？
んーーと……
……
なんだっけ
なあ？
……ああ……
馬鹿じゃないの
おまえ
憶え悪いなあ
にゃ？
ららっ
イカが
話してるぞ
さては タコ野郎が
イカに化けたなっ
よーーし イカの
生食いしてやろう
コラ
やめろっ
オレは
異断銀だぞ
なにーーっ
異断銀!!


ああっテマリの体が溶けたので このイカにのり移ったんだ
うーむっ タコもいいが イカも んまそーだな
コラ ヨダレはやめろ
それより呪文を言えっ いいかっ
まったく
ホントに憶えの悪い奴だ
いいべよ ちゃーんとできたんだから
しっかし
誰も いないぜ
みんな溶けてしまったんだ
らっ


なんだコレは？
うっ
シュル
シュル
ホッホッホッホッ


どうだね
新しい生命の海だ
新しい生命の海!?
おまえも溶けないか?
ふざけんなーーっ
コノヤロッ
この町にはもう用はない
おまえ同様役に立たない
せいぜい大地にへばりついてな
なに言ってんだあのターコ
いいねーっ
最高だねーっ


この町はヒデヨシ町なのよーっ
パン屋も魚屋もみーんなオレのものォ
なにがヒデヨシ町だ誰も働く者がいないんだぞ食い物なんかすぐ腐っちまうぜ
5日後
うーーっ
さすがに腐った食い物は食えませんなあ
しかし なかなか島つーものはないもんだなあ
にゃっ
島だーーっ


えーーっ
みなさん
大変です
早く逃げるのよーーーっ
早く逃げないと
大ダコの噴火が
起きて みーんな
溶けちゃうのよーっ
なに言ってんだ
コイツ?
食い物屋は
特に必ず
逃げるよーにね
ヨダレたらして
馬鹿じゃないの
ああ
くっそーっ
誰も信用
しないぞっ
ヨダレ男の
話など
誰が聞くかよ
んっ



あらっ ヒデヨシ君
誰? アンタ
ええっ ツキミ姫だよ 憶えてないの?
ツキミ…?
ツキミ……
あっ ツキミ姫
な——んだ こんな所に 住んでるのかあ
住んでるんじゃ ないぞ
みんなが 帰ってこないから 捜しに来たん だよ
フ——ン みんなはもう 溶けたのよ



溶けた!?
そう パンツもテンプラもテマリもヒデ丸もみ──んな溶けたのよ
どういうことなのだ?
んーとね……
んーと
オレが説明しよう
あら イカがしゃべった!?
ツキミ姫とやらオレはこのイカにのり移っているが異断銀という者である
うわ──っなんだありゃ
ああーっ
説明しなくてももうすぐ


ドゥッ
みんな溶けちゃうよーっ

第七話　波動王海談記⑮
〔憎しみは果てしなく〕





みんな溶けちゃう?
そーなのよォ
オレは波動王のはしくれだから溶けないけどな
ツキミ姫は溶けるわよ
会ったばかりで[redacted]えるとはのう
シュー…


キラキラ光った粉
アレのせいなのよーっ
うわっ
おっ
溶けます溶けます
ら
溶けないねえ
フフッ
ホラ
おっ透明な卵入りかよ


透明といえば君の周りにも変な気配が漂ってるぞ
にゃっ
ホラ
ら
なんだこれは
不思議だね
しっかしみーんな消えちゃうと
この町のモノみ――んなタダになるんだよなあ
そんなことより何故こんなことが？
大悪党のタコのせいだよ



タコ!?
おっ
なにあれ?
新しい生命の海…と言ってたぞ
らっ
あいつらだ
おっ デブ猫 またおまえか
…んっ



ほう そこの娘
お主 何故 溶けないのだ?
私はツキミ姫です
貴方は何故 町の者を溶かすのですか
我々 タコは おまえたちに 食われるために 生まれてきたのでは ないっ
人や猫どもは この星で 勝手なことばかり やってきた
だから 溶かしてやるのだ
溶かせば 溶かすほど 新しい海は ふくらむ
このやろうっ ヒデ丸は どうなったんだっ
ヒデ丸…


溶けてしまった者が
自分を想い出すことが
できるものか
この星の生命は
みんな ひとつに
なって
オレ様の想いのままに
動くのさ
ふっざけんな
このタコッ
世界中の命を
ひとつに溶かし
それを
想い通りに
動かして…
そんなことのなにが
楽しいのだ？
哀れな奴…
ツッツッ
無礼者っ
こいつを
始末しろっ


シュ
!
うっ
締めつけて圧死させろっ
こんなの吹き飛ばせるよ
ううっ


つつっ
どうした
吹っ飛ばせ ツキミ姫
だめっ 吹き飛ばすと この生命が 死んでしまう
ほう よく気づいたな
スッ
やっかましーーっ この大生意気ダコめ 降りて来い 踊り食いしてやるぜい
貴様のような男は 断じてゆるさん
おっ かわした 小生意気な 娘め
らっ


シュ――ッ
あっ
なんだろう…
海の色が変わったぞ
バシャ
バシャ
にゃあ
ガサ
ザワッ
ザッ
タコの大軍だっ



ヒデヨシ ゆるすなっ
ヒデヨシ 殺せっ
タコどもが 口きいてる ぞおっ
あの生命体が 分裂して くっついてる からだ
デブ猫 ヒデヨシ ぶち殺せ
オーーーッ
タコちゃん かかって きなさーい
みーんな 食ってやる わよーっ
ぐわっ
ガ
痛でっ
助けて
タコ強い


！
うっっ
しひっ
ボコ
早く逃げるのよ
待て
くっそお
狂暴ダコどもめっ
長い間
人や猫どもに
食われた者たちよ
今こそ怨みを
晴らせっ あの
デブ猫をぶちのめせ
つかまえろっ
殺せっ
カサ
カサ

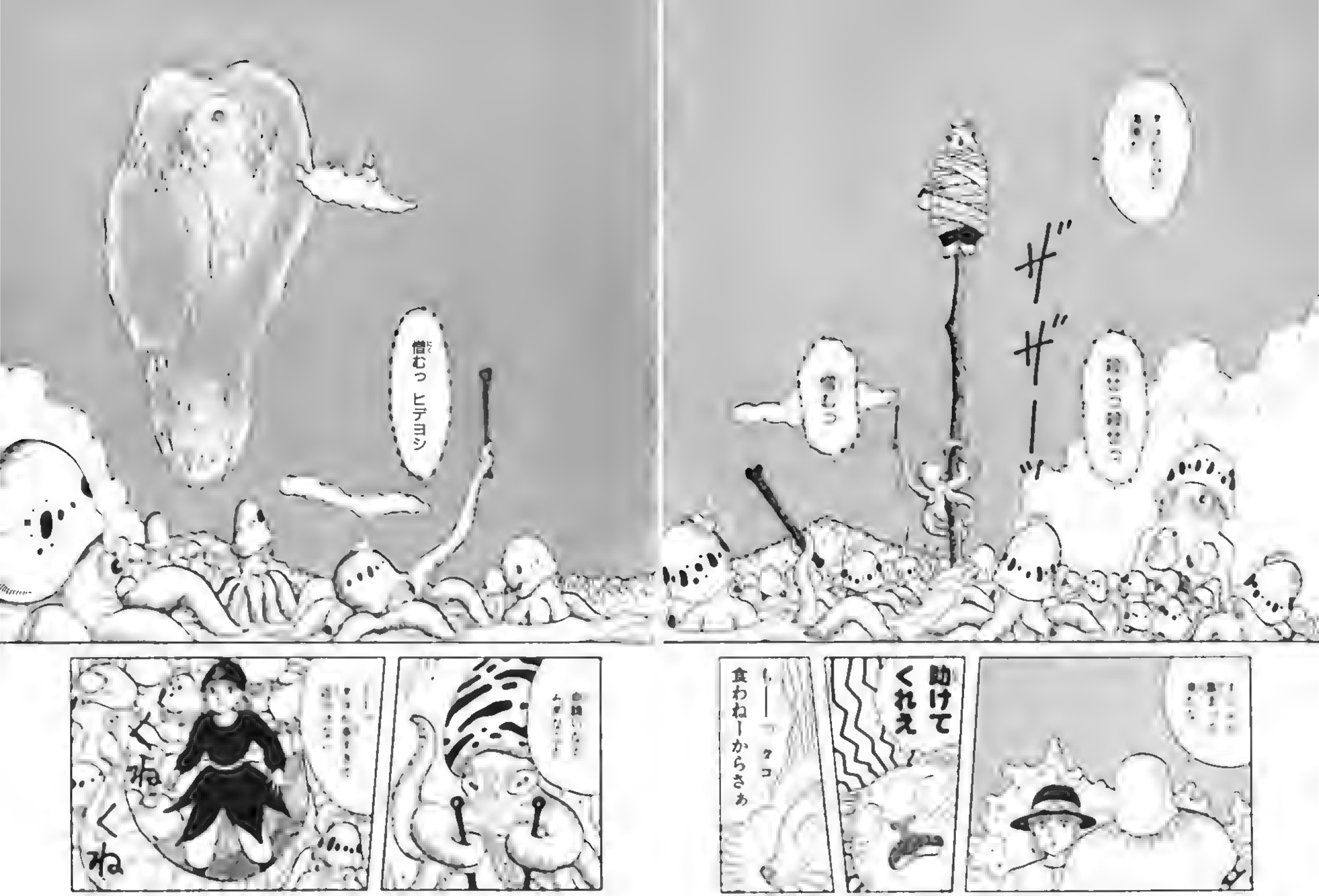

ヒデヨシどこだ?
変な匂いがこの辺からするぞ
ザワ
ガサ
ザワ
くっそおーーっ
マントとズボン洗濯しとけばよかった
しっかしタコに追われるなんて思わなかったわ
それにしてもあのタコどもやけに強いぞっ
君への怨みが深いのだ
ズル
んっ
なんだろこの音?
ズルル


ヒデヨシはどこだあ
ズル
ズル
ズル
にゃあああ タコの家までやって来たわ
これはマズイなうーーっ ほんとうにやられちまう
ここはひとつツキミ姫をオトリにして逃げのびるとするか
誰がオトリだって?
らっ
「ら」じゃないよまったく


げっ
見つかった
いたぞ
出てこいコノヤロウ
オレがつかまえてやる
キャーーッ
ああっ


ぐええっ
人違いよーーっ
私はツキミ姫
ヒデヨシはあの女なのよォ
なに言ってんだもう
見境のない奴だなあ
助けてくれえタコ様ーーっ
もう絶対にタコ食わないからよォ
口から出まかせ言うな
おまえのような奴に食われた仲間が哀れだ
オレがおまえをペチャンコにしてやる


ぐわっ
ギュッ
ヒデヨシ君
こいつも敵だぞ
やっつけろーっ
タコが多すぎるっ
くたばれヒデヨシッ
にゃああ
待てっ
そんなに簡単に殺すのはツマラン
海がこいつの墓場だ
ザザザ

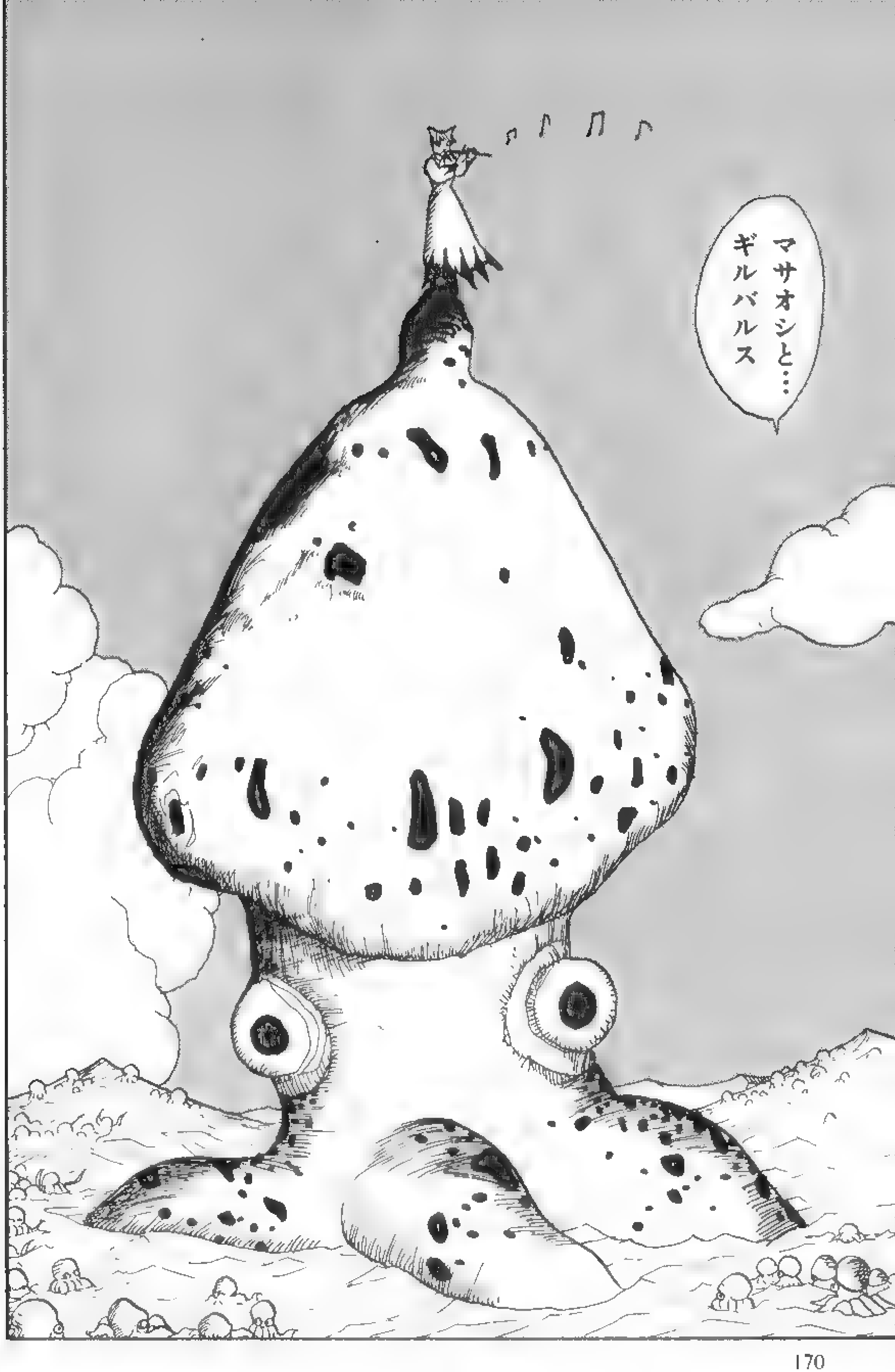

憎むっ
ザザー
助けてくれぇ
タコ
食わねーからさぁ
憎むっ ヒデヨシ
くねくね


さあて ゆっくりと くたばって もらうか
くっすおっ タコの 野郎どもっ
こうなったら 自分で助かるしか ないなっ
…つっても
あいつ…なんの役にも 立たねーしなあ
らっ
また 踊り出した
ちょっと おまえっ 踊ってなんか いないで オレを助けろ よ〜〜〜〜っ
って…


こーゆうのってオレがテンプラやパンツにいつも言われていた言葉だな
感心している時か
あれっ
あの紋様はヒテヨシ君の周りに漂っている紋様に似てるぞ
どういうことなんだ?
バズイッダルダ
バズイッガルガ
さあやれ我が僕
波動王モズマテンプラ
ハッ


らう
ザザザー!!
あっ
紋様の一部が反応してるっ
これって…
わっぷっ
おぼれるう


わうぼ
げふふっ
そうかっ
あれは言葉だっ
ヒデヨシ君っ もっと色んな言葉で
叫んでよーっ
ぷげぼえあ
!
んっ
にゃっ


マサオシと…
ギルバルス

第八話　波動王海談記⑯
〔乗りマショーッ〕




キャーーッ
ギルバルスーーッ
助けに来たのねーっ
早く
悪党ダコを
ぶっとばして
くれーっ
大量のタコが海を移動して
妙だと思ったら
こんな
ことか
くっ
マサオシ!!
あれっ
法王タコの
様子が変だぞ


コラーッ
笛なんか
吹いてないで
助けろよっ
ああ…
しみる…
しみる?
????
???
旋律が
私の心の中に
語りかけてくる…
そういえば
マサオシの
野郎も
ウットリ
聴いてるような…
しっかしよお
元はと言えば
マサオシが
変な船を
出したせい
なんだからなあ
あれっ
おっ


!
うっ
これは!?
異断銀船長
潮目でございます
博士かっ
私は ミドウリを 研究しているうち 奴の毒にやられて ……船長を おそってしまい
マサオシの中に 閉じ込められたのです
ギルバルスの 笛の音で 閉じ込められて いた意識が 開かれたんだ
もうよい… 憎むべきは おまえではない
ミドウリだ


だまれっ
死んでからもうろつく魑魅魍魎どもめ
オレ様の気合を見せてやる
おっ
この呪文は
らっ
あっ


憎い
憎む
憎む
憎い
さあ 憎しみに 集え
憎しみの海に おぼれろっ
うっ
だめだっ
オレの中の 憎しみが 反応している
なんだ この感じは


怒りで体がグラグラする
さあ 吹けっ みなの者 吹くのだっ
シュッ
憎しみのスミッ
うっ
ヒュッ
うわっ
ほう ずいぶん 憎しみの深い 男だのう



体から憎しみが吹き出して来るんだ
ホッホッホッ 憎しみを増殖させよっ
グルエザン バリフルム
ザザザ
にゃっ
海が黒ずんでいくぞ
憎む
ザ!!
ああっ 黒い竜巻だ
ズオッ


憎しみの竜巻が
この星のすべての生物を
憎しみの渦に
飲みこむのだ
そして 体は溶けて
新しい一個の
生命体になる
憎む
くっそお
あの役立たず
最後まで
踊ってるのかあ
踊ってるんじゃ
ないよっ
君の言葉を
待っているんだっ
言葉?
ゲッ
また波が
まっ黒の波だぞ
憎む
ぐわっぷ
おぼれるぅ
ギルバルス
助けてぐりぺ
「ぺ」だっ 判ったぞっ
ヒデヨシ君
こう叫ぶんだ


パラブレ
ペラバル
パラブン
ペラポン
わっぷっ
違うよっ
パラブレ
ペラバル
パラブン
ペラバン
ぐわっ
助けでぶぅ
なんだ
コノヤロ
イカどころか タコにまで
文句言われんのかよォ
私はタコでは
ない
潮目博士だ
かーっ
なんて憶えの
悪い頭なんだっ
まったく
です
どーせ憶えが
悪いんだから
バンフラ
フンフラでも
言えねーだろっ
んなもん
言えるわよ
パラブレ
ペラバル

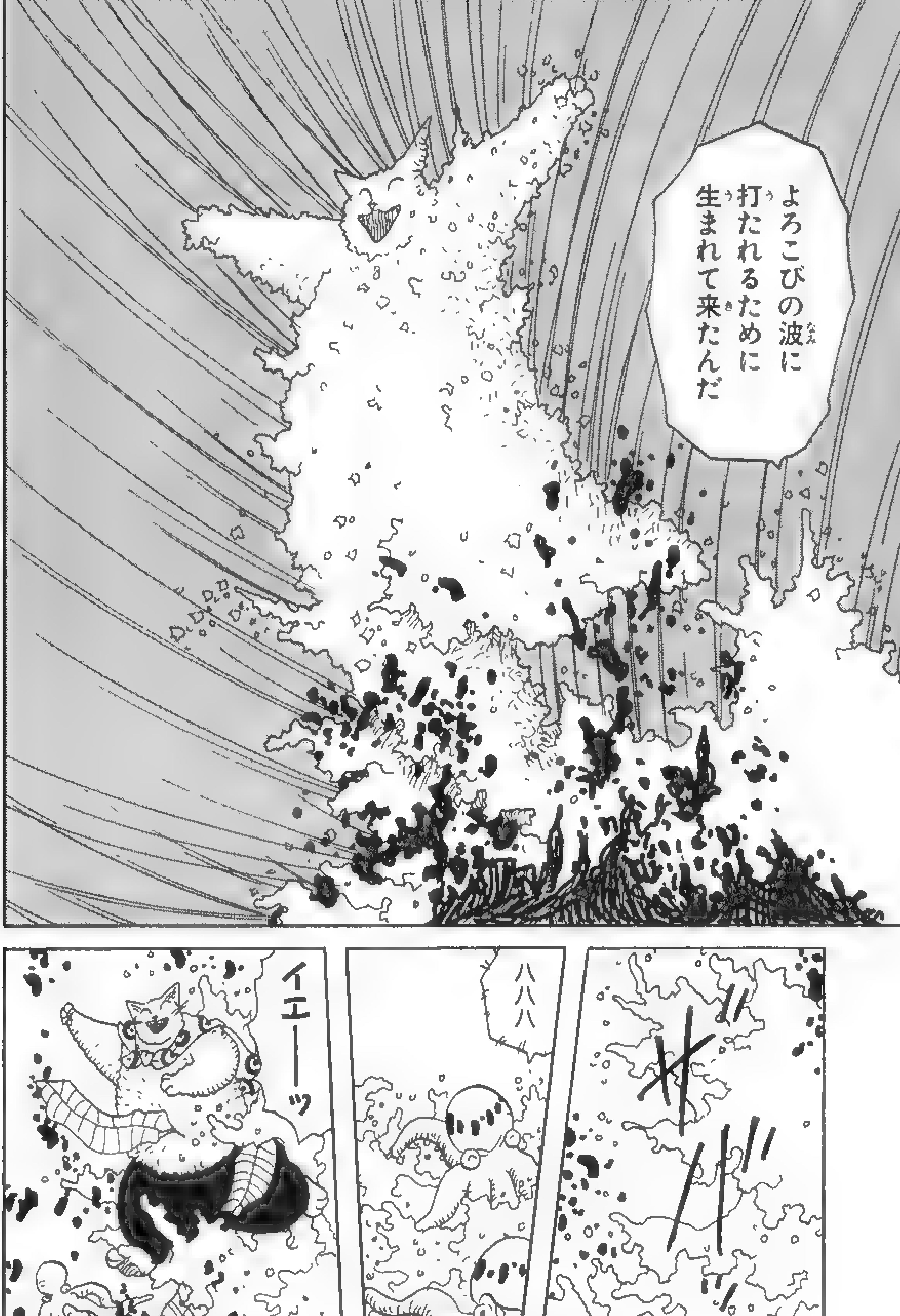

あっ
言えたっ
チッ
あの娘っ
あっ
憎む
うっ
憎む
ありゃ
ツキミ姫でも
そんな波に
つかまっちまうのかっ
体から
吹き出した
憎しみで
動きがとれない


憎しみとは素晴らしいものだ
憎しみで生き物の心をメチャクチャにできる
くぬぬ
憎しみで金しばりだ
なんて恐ろしい男だ
あんなに憎しみをかかえているとは
くっそお
ギルバルスッ
なんとかしろおっ
くーーっ
まったく役に立たないんだからーーっ
だいたいよォ
そこの水柱
おまえもだよ
憎む
憎む
パラブレ
ペラバルッて
叫べっつーから
叫んだんだぜっ

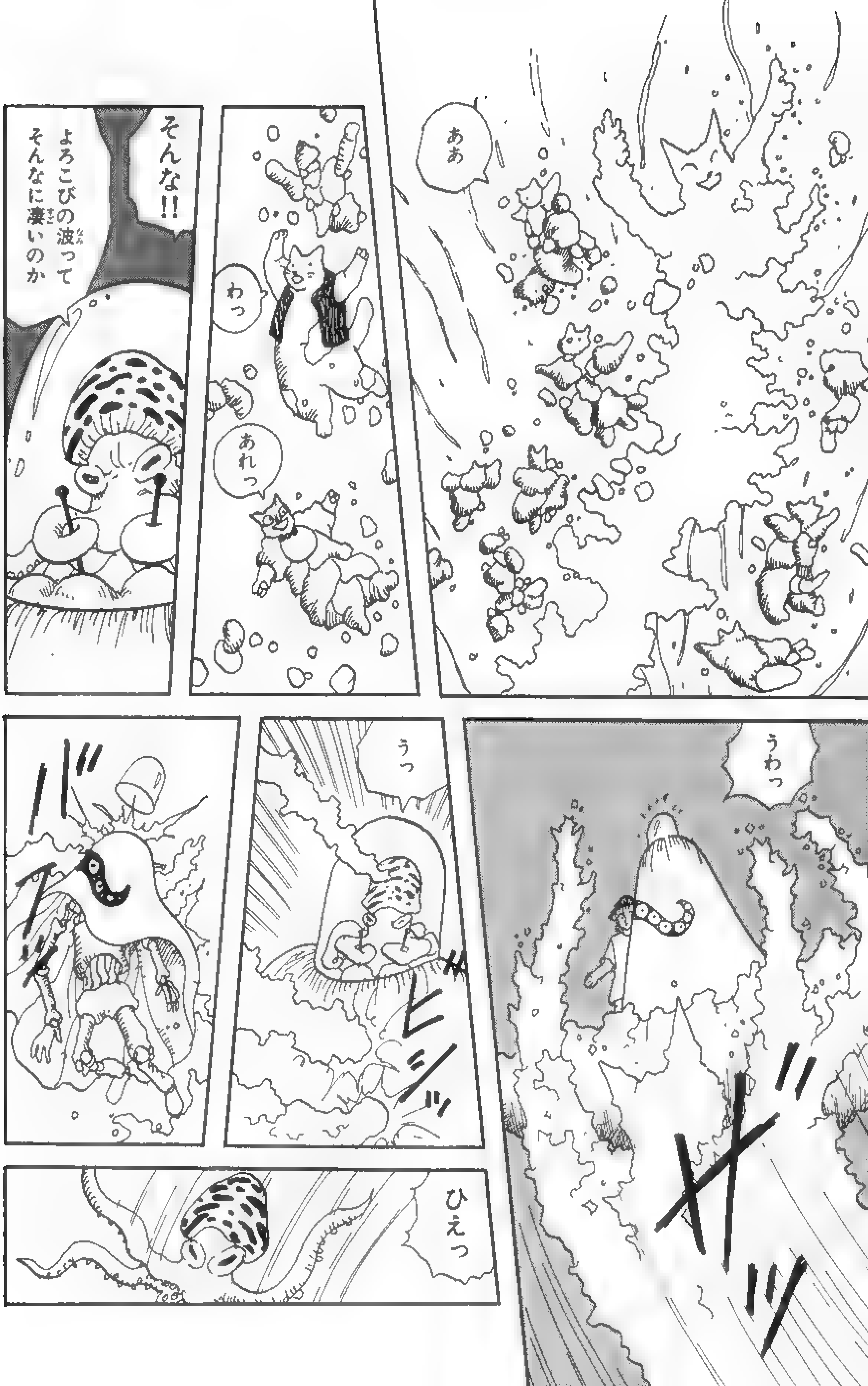

ピッ
ん？
あっ
ズオオーッ
憎む
憎む
ああ
バウッ
!
ズズ
うっ


ゴオッ
凄ーっ
うっ
なんだこの波は!?


う
解き放たれた
ああ
そうなんだ
私たちは憎しみの海に
飲まれるために
生まれて
来たんじゃない


よろこびの波に打たれるために生まれて来たんだ
ハハハ
イエーーッ


気持ちイーーーッ
なんてことだっ あのデブ猫こそ
本当の波動王だ
うっ
ちっ
ザザーーッ
あっ 波が生命体を包んでいるぞ
へっ
溶けた意識がよろこびの波ごときて自分をとりもどせるものか


ああ
わっ
あれっ
そんな!!
よろこびの波って
そんなに凄いのか
うわっ
うっ
ひえっ

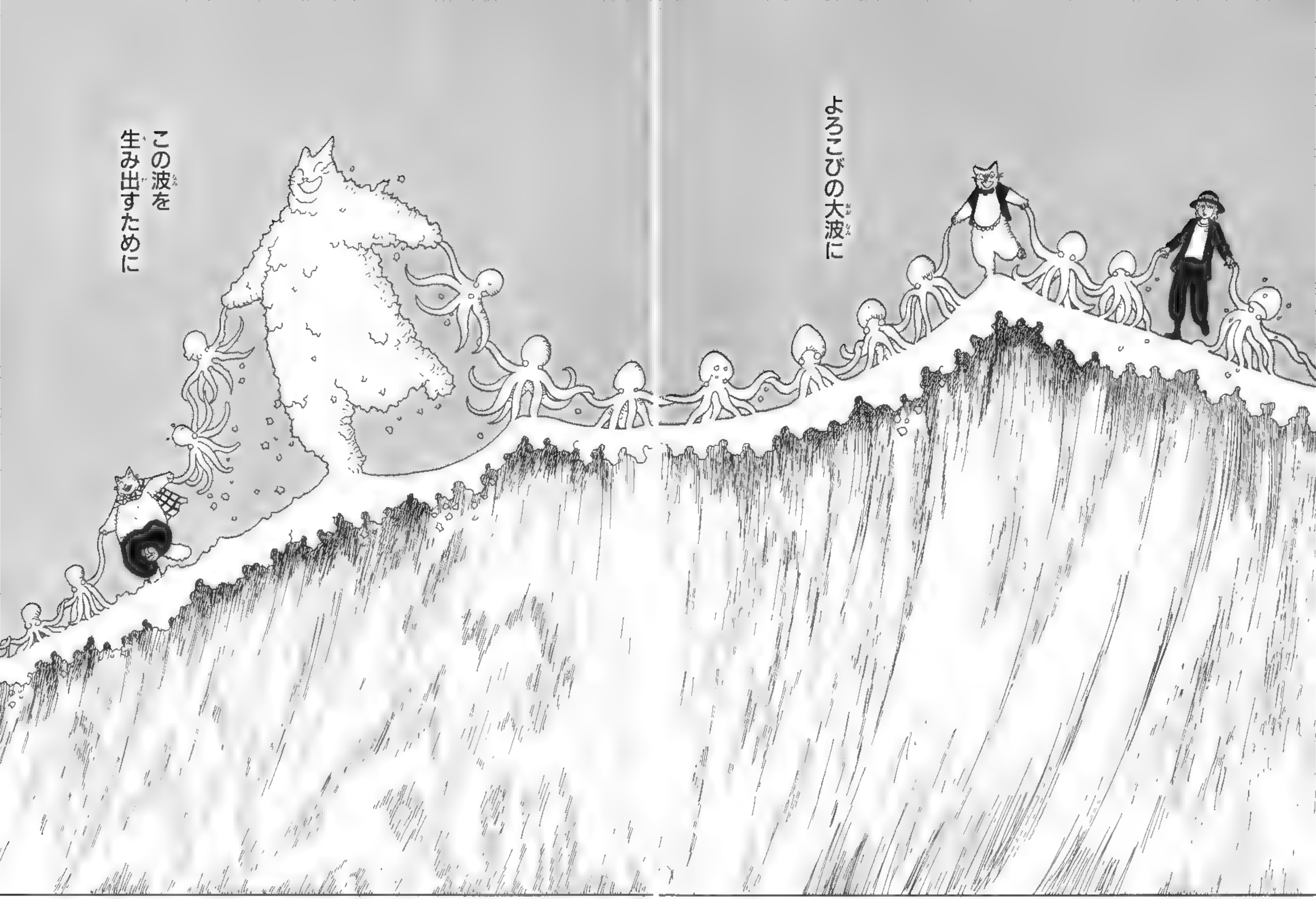


あっ
うっ
!
あれ
オレは今までなにを…?
ヒョーーッ
タコでいっぱい
こらっ法王ダコのミドウリ野郎
生食いしてやる
どこへ行ったあ
くっそお
タコだらけで見つかんねえぞォ
くふふ


タコたちにまぎれてにげよう
待てミドウリ
ゲッ
つかまえたぞっ
この日をどんなに待ったことか
やめろっ
死者の世界にやっと帰れる
貴様をつれて行く
やめてくれぇ
あっコラ食わせろっ
ひとかじりだけでもさせてくれ――っ
くぬぬぬ
あれっ



タコたちが帰って行きますねえ
ザザーッ
波はおしよせて小波になり
行ったり来たりをくりかえす
シャーッ
だがあの日以来銀しぶきの海では
時々 それが現れるのだ
キャーーッ来たわよっ
波動王波だっ
さあ乗りましょう
憎しみなんか吹っ飛ばす



よろこびの大波に

この波を
生み出すために



アタゴオルは猫の森８　おわり


オレにまかせろっ
きっれ――に
食ってやるわよォ――ッ

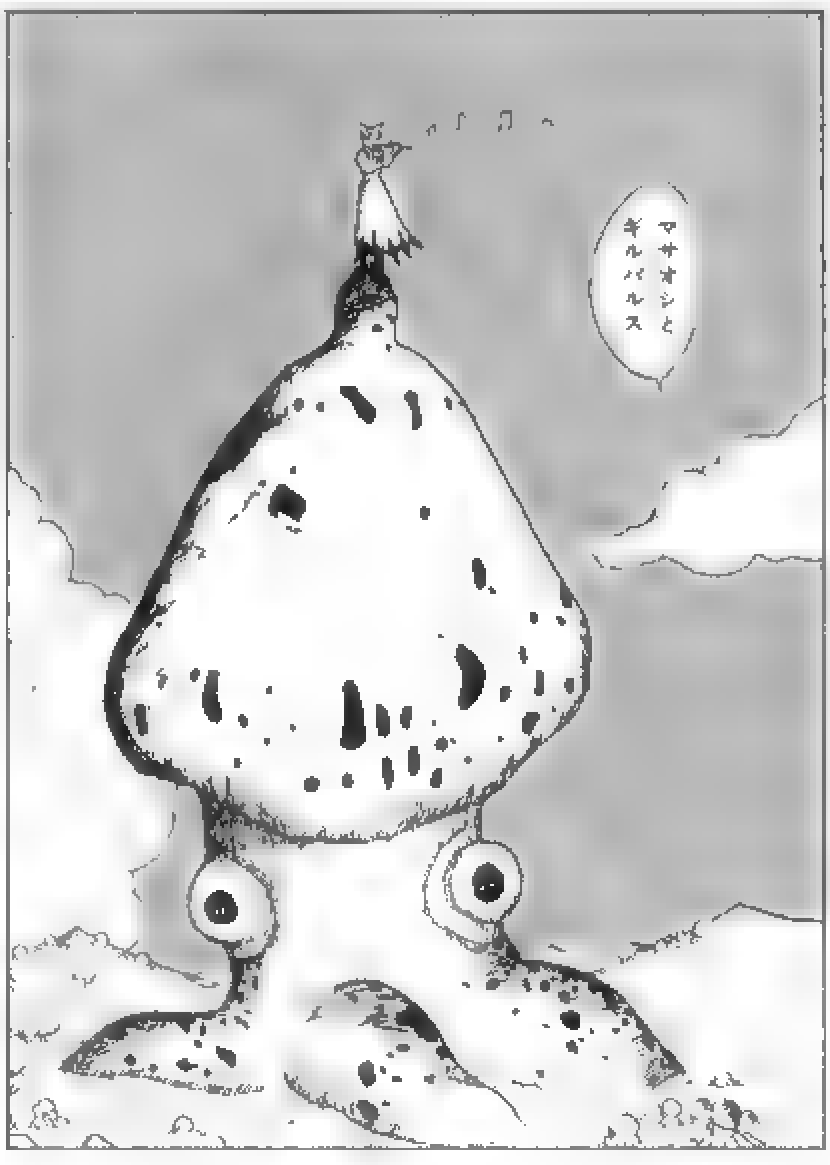
アタゴオル余波8

ますむら・ひろし

八丈島に行った夏。僕は島の人たちと知合いになり、サッカーをやって骨折したこともあって、島の人んちに泊めてもらったりして普通の旅行でみるのとは違う角度から、島や島人をながめて、なかなか面白かった。



そこには島ののどかさと島人の人情がタップリあった。こうして島から持ちかえったものは、松葉杖ばかりではなく、あの島の言葉にならない気配だったのだが、さっそく次のアタゴオルの締め切りは、島を舞台にしたものになり、そこから読みきりモノが続くと思っていたのに続きモノが始まっていった。いったい先がどうなっていくのか、どの程度の規模になっていくのか、そうしたことは予測がきかない。そして物語は十六回続き一年四カ月の物語になり、そのシリーズは途中から『波動上海談記』という名になった。



タコで始まった物語は、そのあとどんな風にタコを持ち出すかでもあったが、まあ、あんな風な展開になった。タコというイキモノを僕は随分イラストなどに描いてきたが、いまだに描いているというこのタコへのシツコサは何なのだろう。我が家は昔、魚屋をしていて、そうした店の匂いは、子供心に生臭くて嫌なもので、魚の内臓や血がまな板

に流れている風景も気持ちのイイものではなく、そうした生活への抵抗みたいな気分で、魚を食うのは嫌だった。しかし不思議なことにタコは食えたのだ。酢ダコも好きだった。タコにはなにか愛らしさがあった風に思う。マサオシなどという名前の大タコで始まった海の物語は、マサオシとギルバルスの登場で最終回を迎えたが、この一年は我が家の新築のために、いろいろと図面を作っていく一年でもあった。この本が発売されるころには完成しているが、作るという行為は、家でもマンガでもよく似ている部分がある。今や完成期日が迫り、いろんな業者さんがやってきては、夜の十時まで穴掘りしたりしている。突貫工事のようになるのはマンガでも同じで、締め切りが無いと、なんでも産み出されたりしないのだ。



　ところで今回の長編のなかでも、僕のなかで何度となく現れる題材が使われていた。それは、「あやつられる」という現象だ。人が他人にあやつられ、意のままに動いてしまう。その原因は、信仰によるものだったり、催眠術によるものだったり、盲信だったりする。集団が催眠にかかったかのようにひとつの方向へ一体となって行動する。かつて日本が太平洋で戦争をした時、日本人の多くはこうした集団催眠のなかにいて、それらの行為に反対する人たちをつるしあげた。「集団が何かにあやつられる」ということの恐怖が、僕のなかに根深くあってそれが何度も現れて来るのだと思う。信じてしまった世界を、信じていない人と語ることの難しさ、それらが集団で走り出したときに、自分が自分のままでいられるのか。こうした人間の弱さを思うとき、ヒデヨシは空のうえでニッタラと笑っている。まったく、馬鹿モノはヒデヨシではなく、状況に飲まれて自分を無くす者たちのことなのだ。

　ここ数カ月、別な仕事で画家ビンセント・バン・ゴッホのことをいろいろと調べたりした。たくさんの彼の画集を見たが、驚くことは本によって色彩があまりに違うのだ。まったく別な色といいたくなるような凄いものもあって、いろいろと見比べるだけで、画集の色具合の難しさが伝わ



って来る。こうした画集のほかにゴッホが書いた書簡を読んだ。ずっと昔「ゴスモス楽園記」を描いた時期にゴッホをテーマにした時、彼の手紙本を読んだのだが、今回は毎晩のようにフトンのなかでそれらを読んだ。それは間接的に画家から送られてきた僕へのつぶやきを聴いているようでもあったのだが、百年前の絵画に魂を塗りこめた男の声は予想外に冷静であり論理的であり、「狂人」「熱狂の人」「炎の男」といったイメージとは違う姿が見えてくるのだった。手紙を通して現れる彼は読書家であり、日本美術への研究もこつこつとやっている風なのだ。浮世絵の模写、あるいは色んな色の毛糸を絡ませた玉による色彩バランスの研究など、彼なりにそうした努力を積み重ねて、独特の画風に辿りついていく。そうした追い込みのなかで、少しずつ狂気の城に入っていったようなその足取りもまた手紙のなかにパラパラと現れて痛々しい。

　こうしたゴッホの生活を知ってから彼の絵画を見ると、絵は違った輝きや印象を現してくる。あらゆる作品の鑑賞方法として、一切の情報を遮断して、純粋に作品だけを味わうという方法と、賢治の作品などで感じる彼の生涯のさまざまな情報を知ってこそ作品が輝いて見えるという、二種類の鑑賞法がある。ゴッホの場合でもやはり絵だけを見ているのと、アルルへの旅立ちの時期の彼の気持ちをしるした書簡を読んだりしてから、「跳ね橋」の絵を見ると、ただ手放しでのどかな風景だとは思えなくなるのだ。こうしたゴッホの絵画をアタゴオル風に描いてみるという企画は、大胆にしていったいドウナルンダロウと僕も思ったのだが、それからの数カ月の結果は、『ゴッホ型猫の日時計』という名の絵本になって、小学館より発売となった。「跳ね橋」の絵をアタゴオル風に描こうとして、まず画面の中央にどの部分を描くかとゴッホの絵を分解したら、跳ね橋の中央が

ピッタリ画像の中心にしてあった。その瞬間、ゴッホが現地でキャンバスを立てて、中心を決めたときの空気を感じたようで、ゾクッとした。そうして絵を大筋で模写してみると、実にデザイン的なバランスのなかにいることがジワーッと伝わって来る。またそのデザインの奥の方で「浮世絵」のデザイン・センスがうごめいているのを感じる。ゴッホは浮世絵のなかから、色彩の大胆さだけではなく、構図のスタイルも学習していたのだ。一見荒っぽくみえる油絵のウネリのなかにあって、構図はガシッとしているという、それはまさに「ゴッホの精神構造」にもつながるもののような気がしてならない。



大胆にして繊細。デタラメ風でありながら計算されている。それは、どこかでヒデヨシの意識にもかぶってくるのだ。ゴッホが尊敬する画家ゴーギャンをアルルに呼び寄せ、ふたりで共同生活するが、強烈な自我を持つ二人が安穏と暮らせるわけもなく、芸術論は激しくぶつかり、ついにゴッホは錯乱して耳たぶを切り落としてしまう。この行為がアルルの人々に恐怖を与え精神病院に入院することになるのだが、耳に包帯をまいてパイプをくわえたゴッホの自画像の、その眼光のうつろさには言葉をなくす。しかしヒデヨシなら当然ゴッホに言うだろう。

「あんた、耳切ったんだってえ。オレもよ、鼠札(ネズミトランプ)でイカサマばれてさ、両耳切られたことあんのよ。えっへん」などとホザクのはみえみえである。アタゴオル風な風景になるということは、ヒデヨシがジッとしていないことであり、「アルルの跳ね橋」の場面でも、書き出してみると血が騒いだ。ゴッホの絵では、画面左でたくさんの叔母サンたちが洗濯している。そうした洗濯による波紋が川面をゆらしている。では、アタゴオルでこのような場面があったら、どうなるであろう。

そこで最初に描いたラフ・スケッチは、叔母サンたちのほとんどが川から首をだしていて、最後の叔母サンが今まさに川に落ちようとしている。その腰の辺りに、長い棒を突き立てドツいているのがヒデヨシ、とこんな風景。しか

し、これではあまりにゴッホ界へのパロディすぎるのではないかというブレーキが僕のなかで起こり、なんともおとなしい絵を描いてしまった。そうして描いてから、やっぱりヒデヨシは刺激的であり、「いいのかよう、こんな絵になって」と言わせてこその爆弾猫なのだとも思った。

　ところで僕は、子供のころから高所恐怖症だった。ダムなどというものを遠くに見るだけでサワサワするし、故郷の吾妻山のなかにある滑川温泉に行く山道の「座頭ころばし」と呼ばれる沢のあたりなど、バスに乗っていると息が止まりそうになった。こうした恐怖のなかで忘れられないものは、東京タワーだ。中学の時、修学旅行で東京に行きあのタワーにエレベーターで上ったとき、途中に階段が見えた。そのとたん「まさか、帰りはアソコを徒歩で降りるのではないか」と不安になり、生きた心地がしなかった。そしてあの展望台の壁に背中をつけて、早くコッケナ異常な場所から地上へ降りたいと神様や仏様に祈っていたのだが、なんとタワーはジンワリゆれていたのだ。壁にへばりついていた僕には、かすかに風でゆれているのがそら恐ろしかった。帰りがエレベーターだ、と知った時の安堵はどれほどのものだっただろう。



　このような僕が自動車を運転するようになってみると、絶壁を走るという行為は頭のなかが恐怖でパニック状態を起こすわけで、端に寄りたくないためにグッとセンターラインに寄って行くから、よけい危ないのだ。危ないとは判っていても身体も頭もパニックだから、とにかく高所や絶壁は走れない。というわけで子供のころからの温泉好きなれど、「秘湯」などというところに車で行くことはできない。山道の絶壁はタマランし、つり橋などもってのほかなのだ。一度、姥湯温泉に行き、温泉の前のつり橋が渡れず、最後

にはって渡った写真がある。ああ、やだやだ。こうした恐怖症の僕が、会津若松から米沢に抜ける道を走ったとき、親戚の隆ちゃんに「ひろし、大峠は、おっかないでさ」と言われた道を気づかずに走っていることに気づいたときは、手遅れ。かたや柵無しの数百メートルの絶壁。道は舗装されていなくて、デコボコ、車がやっと行き来できる幅。しまったと青くなった時はトンネルを抜けて山形県側に入った絶壁の長い道。それから恐怖のなか、独り言を言い続け、走っても走っても、恐怖は飽きることなく続き、そうした自分に腹がたちながら、波のように襲ってくる高所への恐怖。ほんとに寿命が縮むとはこのことだという体験をしたのだった。あれから山なんぞに向かうような走り方は、とんとしないようにしていたのに、数年前、伊豆のスカイラインを走る車に乗って、死にそうな恐怖をダラダラと味わった。まったく高所恐怖症は収まるどころか最近またひどくなってきたのだ。地下鉄の長いエスカレーターが怖い。成田空港の長いエスカレーターも怖い。最後にどんどん高くなると左手で押さえている手すりへの握力がグワァッと硬直してくるのだ。



　こうした恐怖の原因は、僕の額にある傷のせいだと思う。子供のころ、縁側から落ちないようにとわざわざ僕のために作った竹製の柵を乗り越えて、そこから落ちて石に頭を打ったらしく、傷は今も残っている。そうした幼児時代の痛みが、恐怖になって神経意識界に君臨しているのだ。だが不思議なことに、こんなに高いところが恐ろしいのに、アタゴオルは高所の巣であり、ヒデヨシはそうした高所のテッペンでつま先立っていたりする。こうした絵を描いているときは、とても気持ちがイイのだ。まったく描くという行為は、心のなかのいろんな想いの、はけ口なのだ。心が七転八倒することこそ、描くという行為を呼ぶのだ。だからこそ安住や安泰や安眠やグータラを望むアタゴオルの者たちのために、僕は反動の海を泳ぎ、日常のニッチャラクッチャラの無念さを痛飲しながら、その痛みを背負わなくてはならない。走るとは、そういうことなのだ。

(初出) コミックフラッパー 2004年8月号～2005年3月号

MFコミックス
フラッパーシリーズ

MFコミックス
アタゴオルは猫の森………………8

2005年3月31日　初版第1刷発行

著者………………ますむら・ひろし

発行人…………松岡博治

発行所…………株式会社メディアファクトリー
〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
TEL 0570-002-001　03-5469-4760(編集)

印刷・製本…………大日本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-8401-0999-0 C9979